323
591

始

15980
き

英語科研究者の爲に
文検受験用

伊東勇太郎著

東京神田
大同館藏版

大正
14. 2. 21
内交

323-59

序

今日我國に於ける外國語の研究のうち、英語の研究ほど盛んなるは無い。而も英語英文學の堂に升り室に入る者が洵に少いのは、何の爲であらうか。毎年文部省に於て施行さるる英語科教員檢定試驗に於て受驗者の數幾百を以て數ふるのに、首尾好く合格する者が寥々晨星も啻ならないのは、何の爲であらうか。いづれも、研究の方法其の宜しきを得ず、寧ろ全然研究の道を知らざるの致す所ではあるまいか。こは啻に獨學の研究家に限つた事てなく、專門の學校に於てすら、教授者は己がじし好きな書物を選定して生徒に授け、程度、脈絡、組織等に到つては多く顧慮を費

さないやうである。著者茲に慨するところあつて、淺識をも顧ず、英語研究家の爲に研究の榜様を示し、專門學生の爲に大體の程度を示さんが爲に此の書を草したのである。

本書は、中學卒業後獨學三ヶ年にして文部の檢定試驗に合格い得る勉强の方法、といふところに目安を置いて、書物の程度並びに研究の方法を說いたのである。固より斯かる事に絕對不易の標準といふものの有り得べき筈は無いのであるから、必ずしも絕對に本書の所說にのみ遵據すべしといふのではないが、併し是を大體の標準として人に依つて之に幾分の變通を加ふる時は、英語研究の正道として大なる謬りは無いものであるといふことは堅く信じて疑はざるところである。

本書によつて、若し讀者諸賢のうちに、斯學研究の興味を煥發し斯道に向つて精進しやうといふ者が、一人でも出來るならば、著者の本懷は之に過ぐる者は無いのである。

大正十三年十一月

崎陽無一物庵に於て

著者識す

英語參考書

伊東勇太郎著
◇最新英語獨習講義（近刊）

酒井溫理著（三版）
◇英文法例題通解（全壹冊）
金貳圓五拾錢【送料十二錢】

大同館發行

目次

總論

第一章　英語研究の興味　一
——英語は偉大なる民族の記念塔——文檢は登龍門——英語研究の三時代——學問は樂しんで爲すべきもの

第二章　試驗の模樣
——試驗の法式は膠柱を要せぬ——受驗者の心得——豫備試驗の注意——本試驗の寸法

本論

第一章　過渡時代　二
——必要書目

○英語科研究者の爲に

第一節　解釋力　一五

――先づスケッチブックを讀む――單語本位――蚊の鐵牛を咬むが如く鼠の堅材を嚙る如く――スケッチブックに出る程の單語は必ず憶えねばならぬ――勉强法實例――アクセントの爲めに辭書を引け――スケッチブックを讀む順序――トレヂュア・アイランド――スティーヴンスは名にし負ふ名文家――熟語に富む――話の大筋――殺人の光景――ナショナル第四讀本研究――西洋のにほひ――會話の用句――ガリヴァー巡島記――滿腔の人間憎――年少者必讀のクラシックス――ガリヴァー巡島記の大略――ラガドー大學の學者達――ブックメイキング・マシーナリー――ヤフー――ツワイス・トウルド・テイルズ――その中の趣味ある篇々――筆致の一般――ユース・オヴ・ライフ――金銀珠玉を鏤めた引用句

第二節　作文力　四八

――作文力養成の方法は澤山ある――先づ今年は和文英譯の書物を熟讀暗記する――短文と共に長文――作文には特有の語彙も要る――英語青年の和文英譯欄

第三節　文法力　五一

――文法とは何ぞ――文法は語學研究の捷徑――初めは簡單なものから――文法的讀書法――その一例――ネスフィールドの第四文典――その初めの方を讀む

第四節　詩　五七

――詩は英語の脊髓――英語では文法の例にさへ詩を引く――詩を省略するは赦すべからざる罪惡――情緒生活――それが無くば人生は如何に落莫――詩が解らないのは人間たる資格を闕如せる證左――英詩の諧調はアクセントの上に立つ――センテンス・ストレス――詩に通ずるは散文の諧調の美惡を鑑別する階梯――詩の讀み方――スキアンシオン――四種の平仄――詩の入門としてのテニスン

第五節　發音學の知識　六七

――發音學は語學研究の基礎――發音學とフォネティック・サイン――發音學と岡倉教授――チョウンズ氏南方英語の音――居常洋人に接する人にも必要――英國散文のフォネティック・トランスクリプション――文章のリズム――ウィーク・フォーム

第六節　英文學史の知識　七二

――二種の英語研究者――文學的傾向と語學的傾向と――英語研究の背景としての英文學史の知識――その趣味として――初めは邦文のものから

第七節　雜誌　七五

――時事英語――英語界の趨勢を知るに便――英語青年の內容

第八節　辭書　七六

——最小限度の必備の辭書——齋藤氏の中辭典——語原の研究——英語の發音は饅の如し——類推は何ぞ
り危險——ヂョウンズの發音辭典——フォネティック・サインは二三日で覺えられる

第九節　解釋力養成着眼點　八一

——文脈を明瞭に看取すること——單語の暗記——暗誦——『ノート・リーディング』

第二章　中堅時代　八六

——必要書目

第一節　解釋力　九二

——先づヴィカー・オヴ・ウェイクフィールドから——總べての人の愛讀書——作者は英國第一の愛嬌者——その略傳——彼の傑作數篇——ヴィカー出版の來歴——ユーマーと格言的名句に富む——ヴィカー研究の方法——クリスマス・キャロル——第一流中の第一流十一家——詩人六人小說家五人——ディケンズは其の一人——ディケンズの傑作中の必讀書——クリスマス・キアロルの筋——筆致の一般——切れば血の出る文章——有り得べからざる事も有り得べきやうに——易しいやうで難かしい本——セサミ・アンド・リリーズ——その梗概——沙翁の女性——仕事こそ人生を解決する鍵——作者ラスキン——近代の文豪——石に懸りたい眞の書籍——カアライルの英雄崇拜論——その趣意——カ氏の文章は奇癖に富む——言語畫家の雄——ダンテ、シェイクスピア論——ラムのシェイクスピア物語——天衣無縫の妙——チャールズ・ラムの人となり——人間味——英國第一の隨筆家——沙翁時代の劇作家の美の發見者——ディケンズの子供の英國史——バンヤンのピルグリムス・プログレス——文體の一例——トマス・ハアディの短篇——ヂョージ・ギシングの短篇　一二三

第二節　作文力

——復文法とは何ぞ——名匠苦心の痕——作文の模範として選ぶべき英文の名家——スティーヴンスン
ハアディの文に感嘆の聲——ストウ夫人のアンクル・トムズ・ケアビン——デ・クキンシー、サッカリー、ス
ティーヴンスン、ハアディ——阿剌比亞夜話——リーダーの四、五——平易明達より個性へ——選譯法とは
何ぞ——先づノートブックを用意——唯寫しては机の抽斗に——氣の向いた時に取り出して飜譯——和英
辭書を用ゐるも宜し——ロージェーのセソーラス——文章採擇の實例　一三三

第三節　文法力

——ネスフィールド第四文典の續き——慣用語句——語原の說明——英語の歴史——外來語混入の由來——

英語科研究者の爲に
——讀書の際生じた疑義着々として釋く——力は加速度で進む——後學新進の士は先躍をして頽色なからしめよ

六

第四節　詩　一三六
——詩を味ふ素養なき者は通過せず——心を潤すやしなひ——詩の空氣に浸れ——英詩選釋——上田敏氏の衣鉢——ゴウルドン・ツレジュリーは英語の唐詩選——時代は逆に溯れ——易より難へ——文學的價値の高き物へ——更に進んで藝術的匂ひの高き作へ——路傍の一草にも涙を濺ぐ——ウァーズワースの義務の讃は好詩に非ず——涵詠優遊詩魂を養ふ

第五節　英國事情　一四三
——架空を排して足を地に着く——クロンのリッツル・ランドナー——豐富なる材料を壓搾す——英學生必携の良書——英國風物談——繪單語——繪入の本を買へ

第六節　發音學の知識　一四六
——ヂョウンズの發音學——何といふ頭の良い人——標準發音とは何ぞ——簡淨明潔六十九頁——有用文字——イントネイション・カーヴ——人による發音の癖——生ッ粹の倫敦ッ兒の發音

第七節　英文學史の知識　一四九
——上下綿々千二百載——ブルック氏英文學史——穩健精到な批評眼——流麗豐潤な史筆——先づ時代の觀念を明らかに——餘白に簡明なる見出しを——時代別の概觀

第八節　會話　一五三
——會話英語——ヒアリング——フォーミュラの暗記——街頭の會話は教室の會話とは別——洋人と個人的交際——小說速讀——日本の西洋人の手心——耳慣らしの緊要——疊の水練——會話の諸弊——リッツル・ランドナー——諧謔を弄して興味を添ふ——傾聽に値する會話上の注意——卓上演說——誤りは成功への飛石

第九節　新聞　一五九
——一度は通過すべき關門——生きた英語——排日法案——殺人光線——解釋力養成と新聞閱讀——見出しは簡單にして印象的——英字新聞の讀み方

第十節　書翰文日誌　一六二
——自然を尙ぶ——簡潔なる用語法——日誌で達文家となる——日誌は變化あらしめよ——なぐり書きに

目次

七

自然の推敲

第十一節　辭書　一六三

——コンサイス・オクスフォードは小辭書中の權威——言葉の眞の意味が解る——人智の靈活さの限り

第三章　博渉時代　一六五

——學問は一峰登り盡して又一峰——悠々として求知の長程に

——必要書目

○第一節　讀書力養成　一六九

一、小說三册——ピックウヰック・ペイパズ——リツル・ネル——オリヴァ・ツウヰスト——私塾經營者の惡魂膽——西洋膝栗毛——手當り次第に開けて憂さ晴らしに——サイラス・マーナ——人間性に目醒める——心理描寫の雄——女ながら十一人中の一人——八十四歳で健在——ハアディ翁の傑作の數々——テスハアディの自然描寫——自然と人心との交渉——露がたれる文章——エダドン・ヒース——純眞な天使のやうな女——悲しき最期——その他の小說——サーター・リサータス——總べて是れ著物——題號の意味——詩人的情熱と洞察

——二、エッセイ三册——英文學中一枝の花——論文といふは當らず——亞鉛の袴——人道に對する涙——理窟以上の理窟——漫文か隨筆か——自己の感想好惡を僞らず飾らず出す——英國エッセイの傑作——涙ぐましい一生——エッセイズ・オヴ・イーリア——取り敢へず讀むべき篇々——明智の人ホウムズ——多種多樣の文體と英語——短時間で最大の效果を收むるに好適の書——ヴァーヂニブス・ピューエリスケ——スティヴンスンはエッセイと紀行文の大家として殘るべき人——悟りを開いて居た人——鋭き叡智と深き味——再讀三讀して敎を受くべき書——その他のエッセイスト

——三、沙翁劇三册——劇はもと詩——英語研究の最終の美果——人生の六欲七情描破し盡す——最も親み易き劇ヂューリアス・シイザ——アントニー の煽動演說——ブルタス は沙翁が描いた 最大善人——哀を催す戰陣の一夜——ヴェニスの商人——シァイロック——沙翁の驚嘆すべき創造の一——月光と音樂の夜——天體の音樂——ハムレット——最も人に愛せられる若き皇子——性格の複雜——引用句の源泉——『引用句をはぎ合せて劇を作る』——英語に最大の影響を與へたる書物——聖書と沙翁——樂しみはおのづから湧く——原作熟讀の後は批評を——沙翁劇繙讀の順序

○第二節　作文力養成　一八四

——プレシー・ライティングとは何ぞ——筋を我が文章で綴る——西洋人に話して貰つてそれを綴るもよし——選譯法を厲行せよ——多岐を尙ぶ——和英辭書を用ゐず——澁滯せず成るべく迅く——筆慣らし

英語科研究者の爲に
絶好練習法——邦文抽出の實例

第三節　文法力養成　一八九
——讀書の際の實地討究——ネスフィールド第四文典の精究——修辭學——詩語粹金——詩形論——隱喩法——形容詞轉移——婉曲法——對句法——酒落——反語法——否定强調法——史詩、抒情詩、劇詩——詩を讀む上に心得べき事項——市河氏英文法研究——ディケンズの俗語の研究——讀書子に非常な益を與ふ——エスパセン——クルイシンガ——細江逸記氏英文法汎論

第四節　詩　一九二
——グレイのエレヂ——極度の彫琢を經た完全な名玉——文學上の共有財產となつた名句に富む——情熱に富んだピンダリック・オウド——農民詩人バーンズ——情火炎々——同情すべき詩人ウィリアム・クウパ——誰か涙なくして讀むを得む——コリンズ——天才ブレイク——ヂョン・ミルトンの名全卷を壓す——抒情詩の傑作中の傑作——精煉した詩思——壓搾した詩情——醇乎として醇なるポウエットリ——神人シェクスピヤ——才人の才華燦として目を奪ふ——スペンサアの結婚讃歌プロサラミオン——春は曙百千鳥樹間に鳴き交す——白村譯註現代抒情詩選——英國は詩の國——バイロンのチャイルド・ハロルド——希臘羅馬に對する趣味を增す——スペンセリアン・スタンザ——ウォータルーの前夜——死に行く鬪士——月下のコリシアム——豪宕雄渾なる海洋の讃美

第五節　英國事情　一九七
——ロンドン案内記——機上映寫の市街圖——クロンのリツル・ランドナー——マクス・オレルのヂョン・ブル

第六節　會話　一九八
——大切なるヒアリング——英語を記憶の奥殿に祭り込まず隨時隨所唇頭に浮び來らしめよ——指端に常備——直讀直解——英語で考へる——英語で夢を見よ——同學の日本人と英語で談話

第七節　發音學　二〇〇
——ヂョウンズの發音學——音標文字英散文——樂しみがてら勉强がてら

第八節　英文學史　二〇一
——小日向定次郎氏現代英文學講話——現今盛名を恣にせる作家——英文學紹介の權威平田禿木——我國目下の英文學研究の大家——浪野吳岸——禿木、是因、光知、藻風、勇、——市河博士——言語學的研究の權威——英米文學輪廓史——記憶の整理には便利

第九節　教授法　二〇四

——英語研究家として一考すべき問題——諸種の教授法——グアン、ベアリツツ、ナチュラル・メソッド、ディレクト・メソッド、ニユー・メソッド——古色蒼然たるリードル・メソッド——最も適當なる方法は？——殺人的方法——一旦邦語に飜す——オラル・メソッド——口の體操——繰返し——習慣形成——メカナイジング——キャテナイジング——殆んど無意識に——一ケ月乃至一學期位は課本なしに——フォネティック・サインで發音を正確に——眼前の小利と永遠の大益——オラルを本位に——教科書は覺え書きの積りで——インペラティヴ・ドリル——模範文の暗誦——シークエンシアル・シーリーズ——外國語口頭教授法——英語教授の新問題

第十節　神話聖書の知識　二一一

英語は知識の集積——ゲイリー氏の古典神話——神々の戸籍調べ——初學神話に入るの門——バイブルは人間文書——文學として讀むべし——文學として屈指の傑作——『平明、感覺的、熱情的』——バイブルを天地に留めば人間の眞相を傳へむ——先づ一讀すべき卷々——欽定譯、改正譯——音調の美——含蓄と象徴味に富む——バイブルの資料となつた文獻——ダムロウ氏の註釋書周到にして簡明初學に最も便利

第四章　試驗前三ケ月の勉強法　二一六

——筆慣らし——無論和英は用ゐない——時には天來の妙文句——第一稿を決勝點とする覺悟——英文和譯の爲めには一冊の書を丹念に研究——ホウムズのオートクラット——單語を矢鱈に覺えよ——發音に精細なる注意——文法的讀書法——プレシー・ライティング——トランスクリプションの書を讀め——料理の食べ方、室内の諸道具——器用な會話と文法上の誤なき談話——笑話、滑稽文、謎の研究——ユーマの玩味——書取——英式、米式——耳、意味——パラフレイズ——豫備試驗の勉強法と本試驗の勉強法、一目瞭然——パラフレイズの實例二つ

第五章　合格後の勉強　二二八

——小成に安んずる莫れ——漸く研究の第一歩——人道の悲み——傑れたる魂の妙なる香り——研學最終の美果——本殿は山上に在り——先づ沙翁より始む——沙翁の研究が如何に讀書力を造るかは知る人ぞ知る——沙翁から年代順に降る——その次第——次には年代順に溯る——その次——チョーサーから中古英語へ——次にアングロ・サクソンへ——英語の補助學科——文學鑑賞の研究法も矢張り沙翁より——中古上古の英語の代りに希臘羅馬以降の古典を——文學の本街道——我國研究の彼に遜色あるは素養の點——希臘語は最高貴の言語——飜譯と原文——香氣を移すは難事——讀解力養成の次には事實の憶記——

聯想による感興――ホーマーの二大雄篇――イースキラス、ソフォクリーズ、ユーリピディーズ――アリストファニス――ピンダー――シオクリタスの田園詩――ヴァーヂル――ホレース――オヴィッド――セネカ劇――ニブルンゲン・リード――ダンテの神曲――タッソー――アリオストー――セルヴァンテス――カルデロン――ゲエテ――學問の腹が出來る――宇宙を達觀し、生死を踏斷し、悠々として日月を度る――樂しんで憂を忘れ、老の至らんとするを知らず――學問の極致

―《目次終》―　一―六二

最近文檢英語試驗問題集

文檢受驗用

英語科研究者の爲めに

伊東勇太郎著

總論

第一章　英語研究の興味

英語の研究！　何といふ興味深い事業であらう！

「英語」は實に、質實剛健で而も富贍の想像と夢幻の詩味とを多量にサクソン民族、峻嚴狎れ近づき難きこと天そそる巉巖の容易に登攀にして而も溫情と滑稽との美花を隨所に咲き匂はして居るアング

の偉大なる民族の、幾千年來綿々として盡きせざる氣魄と、情感と、涙と、血とを薫き込めた一大記念物である。之に觸るれば、丁度海原の濤の轟きと嵐の咽びとを聽き得るがごとく、汪洋たる斯の民の聲を撲たれるものがあるのである。げにや言語は靈あるものである。追放を蹈み流離の苦き杯を啜り人生の辛酸を嘗め盡したる傑れたる魂の、て綴つた傑れた作品に至つては、一言直ちに宇宙の奥祕を闡き、一句卽ちに脈搏つ。一國の言語文學を味解し味讀し味到するとによつて、吾等は其尸尤れたる者と氣息相通じて臂を把つて共に語り、其の悲喜哀歡を分ち、其の卽に觸るることを得るのみならず、一跳直ちに其の心胸の最奥に入つて、そこにして湧いて盡きざる生命の活泉を汲み、因つて以て吾が生を豐富にし、悲愁を醫し、歡喜を高め、生存をして眞に意義あるものたらしめることを得るのである。

年二回行はるる文部省中等教員檢定試驗は英語を以て身を立てんとする者にとつて絶好無二の登龍門で、天下好學の士は宜しく此處に向つて其の力を試むべきである。そして同じ勉强するにしても斯かる目標を前に置いて勉强する時は、絶えず刺戟を得、勵みが出るといふ好都合があるのである。況んや首尾よく此難關を突破して合格の榮冠を贏ち得る時は、花咲き草香る廣濶の田野は豁然として眼前に開け、いづこに向つて吾が研究の鍬を進むるも自由自在で、科學的討究に、文學的鑑賞に、おのがじし好む所に向つて悠揚として研學の道程を辿ることが出來るのである。況んやシェイクスピヤ、ミルトン、キーツ。チョーサー、スペンサー、ブラウニング。ディケンズ、サッカリー、ヂョーヂ・エリオット。メリディス、スティーヴンスン、トマス・ハァディ等の大家巨匠（Great masters）は雲の如く、林の如く、高く文藝の天の分野に爛々たる光芒を發つて居るではないか!!

以下章を逐つて、初めて此の興趣饒かなる研究の旅路に上る者の爲めに、目安を中學卒業後獨學三ヶ年で文檢に合格することのできる所に置いて其の勉强の方法を說い

て見やう。勿論俊秀の士で、並勝れた便宜（アドヴァンテヂス）を有して居る者は二ヶ年でも合格出來るであらう。職業を持つて居て其の傍ら勉强する者は三年以上の日子を要することもあらう。が一日に五時間若しくは其れ以上を純粹に英語の勉强に充て得る者でさへあるならば、そして堅く志を立てて、以下說く所の方法を熱心に遂行して行きさへするならば、優に前記の時日で合格し得ることは固く信じて疑はざる所である。

三ヶ年を三期に分ける。初め一ヶ年が過渡時代。次年が中堅時代。第三年が涉獵仕上げの時代、便宜の爲め博涉時代と名づける。

過渡時代とは中學卒業から專門の英語研究家となる過渡の時代といふ意味である。中學五ヶ年間で得た英語の所得は、大略、リーダー五卷、補助讀本三四卷、英文法二卷、英作文三卷ほどである。極く極くの英語の得意の人の外、平均した所スキフトの「ガリヴァ旅行記」が辭書片手にやつと讀める位で、アーヴィングの「スケッチ・ブック」を可なり難かしがる所である。それで此の時期は讀書、文法、作文力の基礎を造つて次年度の準備とする。この一ヶ年で見違へる程の力が付いて、英語が次第に面白味を增し、次の中堅時代に入る。此の時期が漸く油の乘つて來たミッシリと力の出來る時で、予の所謂「三ヶ年制度（スリーイヤーシステム）」の勉學の中堅を成すので、これで大體學力は出來上るのである。第三年目は以上の學力を更に成熟せしめる時である。まだ薄弱な所があるのを鞏固にし、斑點（むら）になつてる所を修整し、熟（う）れて居ない所を熟れしめる（make mellow）のである。仕上げ卽ち finishing touch を與へるのである。polish（磨き）をかけるのである。二ヶ年で培ひ得た讀書力を活用して博く群籍を涉獵し英語英文學の一般に通じ、百般の英語を修得し、如何なる問題に逢着し、どんな事柄を訊（き）かれても翫通自在に答の出來るやうにするのである。この時代に入れば（尤も前の二期に於ても其の心持ちで進むことが肝要であり又その心持ちで進んで來たのであるが）、勉强が樂しみで、宛かも小兒が胡蝶を追うて百花の野に嬉戲する如く、勉强の爲めに勉强する（study for pleasure's sake）のか樂しみの爲めに勉强する（study for study's sake）

のか分らなくなるのである。一體學問は樂しんで爲すべきもので、苦しいといふ心持ちで爲すべきものではない。「未だ知らなかつた事柄をドシドシ知り、平生の疑ひが着々と釋けて行つて、自然と人生とを日增しに高處大處より觀照することの出來るやうになる（like Prospero）のはこれほど嬉しく樂しいことは無いのである。

第二章　試驗の模樣

檢定試驗の本旨はあらゆる方面から受驗者の英語の實力を驗してみやうといふにある。だから試驗の法式は必ずしも一つの型に膠柱するを要せぬ。千種萬別があつていいわけである。受驗者としては、以下本論各章に說くやうに、あらゆる方面から勉强研究の歩を進めて、拔目なく力を養つてさへ置けば、機に臨み時に應じてどんな方法を以て臨まれてもビクともする必要は無いのである。が、最も有效な試驗の方法と謂へば大體に於て落ち着く處に落ち着くべきものであるから、大體きまつて居るといつてよい。以下最近施行せられた試驗を基としてその模樣を述べて見やう。

當今檢定試驗は大抵春（五月）秋（十一月）二季に施行される。而して豫備試驗第一日に於て國民道德及び教育大意の筆答試驗を課せられることは受驗者たる者皆知るところであらう。

試驗は豫備試驗、本試驗の二種に分れる。豫備試驗は筆記試驗で、文部省及び各地方廳に於て行はれ、英文和譯及び和文英譯の二科である。問題は各々三題乃至四題、時間は三時間乃至四時間である。豫備試驗に通過した者のみ本試驗を受ける事が出來る。兩試驗の間は一ヶ月餘である。

豫備試驗に臨んだ時の注意は、時間を巧に利用するといふ心懸である。問題が豐富で時間が足りない思ひがするものであるから、問題の配付を受けたら、先づ心を落ち着けて、而も急いで、二回ほど讀んでみるのである。そして英文和譯に何時間、和文英譯に何時間と、時間を割りあてて、自分に易しさうに思へた問題から取り懸るべき

である。考へる必要のある問題はあと廻しにして、易しい問題を手ッ取り早く片付けて生じた時間の餘裕を難問題に振り向けてユックリ機敏に考慮をめぐらすべきである。和文英譯の得意な人は和文英譯から、英文和譯の得意な人は英文和譯から着手するが得策である。

本試驗は文部省に於て之を施行する。大正十三年度後期の分は豫備試驗が十一月廿七日と廿九日の兩日、本試驗は一月七、八、十三の三日間であつた。第一日（一月七日）は Dictation 及び Composition。バーマー氏受持。書取は word by word に發音せず、普通の速度卽ち conversational の速さで讀むのを聞くや直ちに書き取り、直ぐに出させる、殆んど訂正する暇もない位に。Composition は或る題を示して、それに關して二十分程話すのを聽いて居て、それを一時間半許りの間に英文に綴つて出すのである。大切な所は成るべく多く note を取つて置いて利用するがよい。文章は氣取つた言ひ廻しや衒學的な言葉をと狙ふよりも plain English を用ゐた流暢な文章が望ましい。併し達意な文章を土臺として時に巧妙な文句を挿んで光彩を添へるのはよいことである。

第二日は所謂 Reading, Translation, and Grammar で、十五六行の英文を別室で十分か十五分下讀みをさせて、然るのち日本人の試驗委員の前に出て、reading をさせられ　次に意味を述べ、或は大意を述べ、そのあとで、徹底して解つて居ないらしいところを捉へて訊き、或は文字のかかり、や文法を質される。下讀みの時の注意としては、初め一二回讀んで見て、ときめく胸で大意が善く呑み込めずとも、恐るることなく、又讀んでみるのである。或は譯して見るのである。時間は僅か十五分間位でもその時の concentration of mind は非常なもので、平日の十倍二十倍の働きをする。大意が呑み込めたら、次には文法を考へてみるのである。殊に自分に取つて難かしく思へるところを繰り返し研究して訊かれた時答へる心構へをする。そして妥當な譯語を考へてみる。斯くするうちに時間が來るであらう。試驗委員は恐ろしい一面に又極めて

優しみを有つて居るもので、朧ろげに解して居る所なぞ色々の方面から懇切に導いて呉れ、遂に解らせずには措かないやうな事をされる。茲に平日の蘊蓄を傾けて、我が學殖の深淺のほどを認めて貰ふもよいであらう。委員は何れも斯道の練達堪能の學者であるから、その質問振りは誠に微に入り細を穿ち、能く答者の病に砭するものがあるので、宛かも淨玻璃の鏡に對ふが如く妍醜長短掩ふに由なきを覺えさせられるのである。

最終の試驗（一月十三日）は岡倉、市河兩教授の前で、文法上の事、發音上の事（普通の綴りの文字を phonetic notation で transcribe させ、又 phonetic symbols で書いてある文章を讀ませる）、及び誤文訂正を課せられ、Palmer 氏及び岡田美津女史の前で會話を課せられる。パーマー氏は又自分で發した急速度の發音をそのまま急速に模倣させるといふことも課したさうである。聽き取り及び會話は成るべく機會をこしらへて練習して置く必要があるのである。

以上は實例に基づいて試驗の一例を出したに過ぎない。前にも言つた通り、時によつて模樣變へをすることは有り得べきことであるから、受驗者たらんものは、先づ實力を養ひ、且英語研究界の趨勢に絶えず目を注いで、最新の研究法に基いた勉强を怠らない用意が肝腎である。

英語研究者の爲に

本論

第一章　過渡時代

先づこれだけの本をお調べなさい。—

讀書力養成（英文和譯）

- The Sketch Book (Washington Irving)
- Treasure Island (R. L. Stevenson)

これは市河三喜氏註研究社發行（貳圓五拾錢）の分が詳註を附してあるので初學者には重寶である。外國出版物では米國の Ginn and Company の Standard English Classics の Hersey 氏註附き（壹圓七拾五錢）が手に入れば詳しいはしがきがあり帆船の操縱法などを說いてあつて便利である。

Gulliver's Travels (Jonathan Swift)

Twice-Told Tales (Nathaniel Hawthorne)

New National Fourth Reader translated and annotated (Kenkyusha)

一名、ナショナル第四讀本研究　熊本謙二郎、喜安甕太郎共編上中下三卷研究社發行。これは「英語青年」誌上に諸家が執筆した物を編纂したもので必讀の良書である。

The Use of Life (Lord Avebury)

清水起正氏譯註北星堂書店發行の分。

作文力養成（和文

增訂和文

和文英

これ
になつて
のから上の巻の特
著二冊物の文法を求むるも宜し。

J. C. Nesfield: English Grammar Series Book IV

これはネスフイールドの文法第四の巻といへばよろしい。詳しい
Grammar and Synthesis for High Schools となつて居る。翻刻物と舶來と兩方
あるが成るべくならば舶來を求められるがいいでせう。

詩

テニスンの詩研究　石川林四郎著　研究社發行（參圓）

發音學

英語小發音學　岡倉由三郎著　研究社發行（壹圓貳拾錢）

Phonetic Transcriptions of English Prose (by Daniel Jones)（壹圓貳拾五錢）

丸善に註文し、無い時は海外より取り寄せて貰ふこと。

英文學史

英文學史　淺野和三郎著　大日本圖書株式會社發行（貳圓五拾錢）

雜誌

英語青年　月二回發行　貳拾五錢宛

辭書

Chambers's Twentieth Century Dict

熟語本位英和中辭典　齋藤秀三郎

An English Pronouncing Dictio

模範英和辭典　三省堂發行

武信和英大辭典　研究社發行

（注意　上掲書目（Bibliogra[illegible]
のは必讀の書たることをあらは[illegible]
以上で一通り用意（equipment）は出來[illegible]

第一節　解釋力

此の一ヶ年の讀書力養成の中心をスケッチブックに置きます。此の時期中に少くとも二回は細心の注意を以て讀了することとする。本書を讀む目的は三つ、一[illegible]（一）小說體叙事の文と論說體の文と雙方に讀み慣れること（三）本書に[illegible]ること。（二）Winkle や The Legend of Sleepy Hollow や Philip of Pokanoket のやうな亞米利加の物語もあれば、The Spectre Bridegroom のやうに獨逸の譚もあり、The Voyage のやうに海上の感懷冥想もあり、大體は著者が魂ひの故郷として愛慕の至情を捧げて居た英國での所見感想で、之を貫くに著者の溫雅な玉のやうな人格を以てし、文を行るに雕琢流麗の美文辭を以てして居るので、一度之に接したものはおのづから惹き付けられて忘るるあたはざる節々が多く出來るのである。即ち英語に對する趣味を養ふことが出來るのである。

本書は初めて手にした時には未知の單語が多くて難かしいやうな感じがするでせう。しかし難かしくても、解らない個所が多く出て來ても、構はずにドシドシ讀んで行くことです。蚊の鐵牛を咬むが如く、鼠の堅材を嚙るが如く、勇猛心を奮ひ起して、讀み破り〳〵して行くうちには第一回に解らなかつた所は第三回目にはおのづから氷釋し、第二回に疑問の儘に通り過ぎた個所が第五回目には嚮きに不可解とした理由が却つて解らなくなつて可笑しくなる位になります。讀書百遍義自ら通ずと古人の言つた事は洵に至當であります。困難を覺えて何遍も何遍も繰り返した所は自然と記憶の中に鳴り響（ring in the ear）くやうになり、外の書物を讀む時に、ア此の語句

は「スケッチ」に有つた、ア此の言ひ廻しは「スケッチ」の何處の所の言ひ廻しだ、此の月夜の叙景は「スケッチ」の何の所とソックリだ、と言ふやうになります。凡そ書を讀むには斯ういふやうになることが極めて喫緊事です。自分が讀んだ何の書に書いてある事なら、外のどの書に引用してあつても想ひ出せるし、類似の語、類似の文に逢ふ時に心は忽ち飛んで曾讀の書に歸るといふ位まで熟讀し精讀し心讀することが缺くべからざる讀書の要訣であります。

スケッチブックに出る程の單語は英語をやる者の第一歩として必ず憶えなくてはならない必要な單語です。何を申せ單語を知つてる事が言語を學ぶ第一の資本で、肝腎樞軸の一字が解らない爲めに文全體の意義を取り違へる事もあり、西洋人と談話する際一語を想ひ出せない爲めに千言萬語を費しても終に要領を得なかつたといふ例しが多々あるものであるから、文章全體の意味は取れないやうな場合にでも單語は必ず辭書を引いて、第一に accent と發音の記號とを丹念に其の文字に附けること。第二に其の語に underline を施すこと。第三に適當と思ふ譯語を二三語その語に近いページの餘白に成るべく綺麗に書き入れること、序でに、引いたといふ印しに辭書にも underline すること。（尤も大きな辭書を underline で汚すことは面白くないから、別にポケット用の小さい辭書を用意して置いて其れに下線を施し、暇の時、人や汽車を待つ時、單調な遠路を歩くやうな時に出して見ることにすれば大に單語の記憶を助けます。中等學生などのやるやうに小さい手帳に誌して憶えるも一法でせう。）

實例を左に示します。

I was always fond of visiting new sçeneg, and obsĕrv'ing strange characters and manners.— Even when a mĕre child

（スケッチブック第一章冒頭）

觀察する

travels, 旅行　I begun my travels, and made many tours of discov'ery into foreign parts and unknown rĕ'gions of my native city,

to the frē'quent alarm' of my parents, and the ēmōl'ument 給料、報酬、利益
of the town-crier. As I grew into boyhood, I extended the 〔gru:
range of my observations. My holiday afternoons were
spent in rambles about the surround'ing country. I made 附近の
myself famil'iar with all its places famous in history or
fable. I knew every spot where a mûr'der or robbery had 殺人
been commit'ted, or a ghost seen. I visited the neighbour-
ing villages, and added greatly to my stock of knowledge stock＝貯
by nōting their habits and customs, and convers'ing with
their sāges and great men. I even journeyed one long 聖人、賢人
summer's day to the sum'mit of the most distant hill,
whence I stretched my eye over many a mile of terra incognita, unknown region 未知の里

町の觸れ歩き、賣め屋。
道遙、散歩
〔假作〕物語
殺した
top
from where

廣濶たる

and was astŏn'ished to find how vast a globe I inhabited. lived in

（右譯――私は生來新たなる場所を訪ひ、珍らしい風俗習慣を觀察するのが好きでした。未だホンの幼年の時、既に旅行を始め、私の生れ故郷の紐育の外人居住の部分や人の多く知らない方面に發見旅行を試みて、兩親に驚愕の念を起させ町の呼び報者に賃錢にあり付かした事も幾たびでありましたらう。長じて少年となるや、私は觀察の範圍を擴張しました。休日の午後は郊外の散策に費されました。郊外で歴史や物語に名高い處には殘らず通ずるやうになりました。殺人や强盜の行はれた場所、幽靈の出た場所は悉く知つて居ました。私は近在の村落を訪問して其の風俗習慣を觀察し其土地の偉人君子と談話を交へて著しく知識の蓄を增しました。夏の或る永い日に、遠い遠い山の頂に登つて初めて見る山河幾十里の上に遙かに眺めやり、吾が住む地球の斯くも茫漠たるものであるかと今更の如く驚いた事さへありました。）

かやうに第一回目は單語本位にして行きます。尤もそれではあまりに機械的で興味が無いと思はれる方は興味を以て鑑賞的に讀んで行くのを併行させる事は少しも差支ありません。意味とアクセントの附け方の繁簡は其の人の單語の知識の多寡によつて固より違ふべきですが、引いただけの文字は必ずアクセントを附けることを忘つてはなりません。又ちつと怪しいなと思はれる言葉は必ずアクセントの爲めに辭書を引いて見るやうにする事が肝腎です。思ひの外間違つた發音を正しいと信じ込んで居るものです。

單語本位にコツコツとやつて行き乍らも、文章の美、叙述の妙、情緒のいみじさ、想像の香ぐはしさがソロソロと讀者の心胸に沁み込んで (Insinuate into mind) 來ないではおきません。眼玉の色皮膚の澤、風俗習慣の末節は異つても人情の大本に至つては西洋も東洋も斯くも同じものであるかと、玆に同感共鳴 (sympathy) が起つて來て、英書を讀むことが面白くて堪らなくなります。頁が進むにつれて同じ文字を何度も引くと、三度四度目には前に引いた事が思ひ出されて來て、自然其の文字を憶へるやうになります。

第二回には前回ほど辭書を引く必要が無くなるので、大變樂な心持ちで讀めるやうになる。只文章全體として前後の關係から良く見ると前に引いて記入して置いた譯語は其の場合妥當で無かつた事に氣が附いて其の文字は復た引き直すといふやうなこともやります。二回目の讀書に元氣づいて來れば、此の項の初めは二回は讀了することにする」と書きましたが何も二回に限つた事はありません、何か興が湧いたやうな場合に同じやうな心持ちを書きあらはした章を抽き出して讀んでみるも樂しみです。二回は三回、三回は四回と回數を累ねるにつれて一層滋味を增し、片言隻語の心持が猶よく解るやうになり、著者の人格も呑み込めて床しさ懷かしさが湧いて來ます書は其處まで行かなければウソです。

スケツチブックを讀む順序としては左の通りする事をお勸めします。

The Author's Account of Himself

The Voyage

The Wife

The Broken Heart

The Widow and Her Son

Rural Funerals

Stratford-on-Avon

The Pride of the Village

The Angler

Rip Van Winkle

The Spectre Bridegroom

Westminster Abbey

Traits of Indian Character

Philip of Pokanoket

A Royal Poet

The Legend of Sleepy Hollow

Christmas

The Stage Coach

Christmas Eve

Christmas Day

The Christmas Dinner

以上を讀んでから、殘つた分を始めから順を追つて仕舞まで讀み悉すこと。

スケッチブックを十章ほど讀んでから、Treasure Island にかかつて並行して讀んで行きます。人によつて一方を片付けてから他にかかる方が良いと思ふ人はさうしてもよろしい。要は此の必讀の兩書を此の一年中に熟誦精讀するにあるのです。「スケッチ」を出でて「寶の島」に移れば、紅紫目も綾なる五月の花壇から浪青く鷗飛ぶ海濱に出てオゾーンの風を胸一杯に吸ふ心地です。「スケッチ」の著者ウォシントン・アーヴィングは 1783 年四月三日生れ 1859 年十一月二十八日逝去の十九世紀前半の人で、其の筆致は十八世紀英國文壇の餘習を受けて雕琢典麗の雅文體であるが、Treasure Island の作者スティーヴンスンは 1850 年十一月十三日生れ 1894 年十二月三日永眠の、前世紀末葉の文傑で、此の物語の時代は十八世紀に置いてあつても、叙事叙景の文章は、簡潔で、繪畫的で、キビキビした (racy and poignant) 今體の文で草してあるからである。

Stevenson は吾國の尾崎紅葉なんどのやうに非常に文章に凝つた名にし負ふ名文家であるから、其の文は一字一句の過不及なく、キビキビと力があつて、人物も場景も言葉の遣り取りも生命を帶びて躍動し、讀者の眼底に鮮麗な印象を燒き付けないでは措かないのである。本篇の主人公ともいふべき海賊の親玉 wooden leg の Long John Silver の人を魅了せでは已まぬ甘言と微笑との奥に不敵の權謀と酷薄なる殘忍性とを藏せる、醫者リヴジの智慮の圓轉窮まるところを知らざる、鷹揚にして人が好いふ爲めに失策多き鄕士ツリローニー、栗鼠のやうに敏捷に、幾たびか危地に投じて險難を切り拔ける少年 ジム・ホーキンズ、其の他忘れんとして忘るゝあたはざる人物及び情景應接に遑あらずである。

本書には又英語學習上裨益する所大なる phrases や expressions が非常に多い。例へば、——"No sooner said than done," "the short and the long of the matter," "brought my heart into my mouth," "within earshot of," "you can't touch

pitch and not be mucked," "none the wiser," "in a manner of speaking," "o pretty distant terms with," "made no bones," "at a pinch," "as clean as a new pin," "as smart as paint," "driven into corner," "after sundown," "It was already candle-light," "about dusk," "I jumped in my skin for terror," "in the gathering evening," "The name of Captain carried a great weight of terror," "What good wind brings you here?" "As hungry as a hawk," "I slept like a log," "since Noah put to sea," "He had Latin by the bucket," "what with....." "what between....." "took their fling," "high and dry," "It was something to.....," "a man of substance," "a woman of colour," "to lead one a dog's life of it," "I can't make head or tail of this," "as like as not," "for idleness or practice," "to hang a leg," "He showed a wonderful clean pair of heels," "He felt a lump in the throat," "within an ace of,"

"cast about," "if the worst comes to the worst," "light and dark, fair and rain," "a precious sight .." "off and on," "in a clove hitch," "hark back," "out and away," "worth his salt," "so far so good," "duty first and pleasure afterwards," "It's the early bird that gets the rations," "holus bolus," "As you have brewed, so shall you drink," "armed to the teeth," "for all the world,"——此等はホンの少し許りの見本を擧げたに過ぎない。英學生 (the students of English) の垂涎を禁ずるあたはざる斯かるたぐひの phrases や巧みな譬喩 (happy similes) はどの頁にもどの頁にも足の踏みどころ無きまでに充ち滿ちて居るのである。說話の巧妙、性格描寫の迫眞等藝術的價値を暫らく措いて問はずとするも、この語學的價値からばかりでも英語研究者の一度は必ず通過すると要する愉快なる關門である。況んや少年の喜ぶ冒險譚として絕妙なるのみならず、成年の讀者をも感嘆措く能はざらしむる立派な文學的作品 (one of the standard Classics) なるに於てをや！

話の大筋は少年主人公 Jim Hawkins が偶然の機緣で寶島の方位と寶の在りかとを示す地圖が手に入つて、之を地主と醫者に見せる。地主は早速探索に出かけることを決意し、Bristol 港で舟を買ひ水夫を募集したところ、其の中に料理人として乘り込んだ一本足の舟乘 (the seafaring man with one leg) 實は海賊の驍將 Long John Silver を加へたばかりに、航海中から同類を語らつて謀叛を計畫してゐた彼は、愈々島に着くに及んで公然敵對行動を取り、島中で柵をめぐらした砦に籠つた Jim 側と激しい戰爭をしたりして、幾多の波瀾を閲したのち遂に謀叛側の敗北となり寶は無事善類側のものとなるといふので結着する、まことに波瀾重疊で、思はず手に汗を握らしたり、面を背けしめたりする所が續出するのである。

筆致の一般を示す爲めに第十四章中の一節、Long John Silver が同類に引き入れやうと勸說して見たが斷々乎として其の誘惑を卻けた Tom といふ水夫を島上で殺す所を、樹陰に隱れて見て居た Jim Hawkins が、其の有樣と感想を語る所を引いて見る。——

And with that (=so saying), this brave fellow turned his back directly on the cook (=Long John Silver), and set off walking for the beach. But he was not destined to go far. With a cry, John seized the branch of a tree, whipped the crutch (松葉杖) out of his armpit, and sent that uncouth missile hurtling through the air. It struck poor Tom, point foremost, and with stunning violence, right between the shoulders in the middle of his back. His hands flew up, he gave a sort of gasp, and fell.

Whether he were injured much or little, none could ever tell. Like enough, to judge from the sound, his back was broken on the spot. But he had no time given him to recover. Silver, agile as a monkey, even without leg or crutch, was on the top of him next moment, and had twice buried his knife up to the hilt in

that defenceless body. From my place of ambush, I could hear him pant aloud as he struck the blows.

I do not know what it rightly is to faint, but I do know that for the next little while the whole world swam away from before me in a whirling mist; Silver and the birds, and the tall Spy-glass hill-top, going round and round and topsy-turvy before my eyes, and all manner of bells ringing and distant voices shouting in my ear.

When I came again to myself, the monster had pulled himself together, his crutch under his arm, his hat upon his head. Just before him Tom lay motionless upon the sward; but the murderer minded him not a whit, cleansing his blood-stained knife the while upon a wisp of grass. Everything else was unchanged, the sun still shining mercilessly on the steaming marsh and the tall pinnacle of the mountain, and I could scarce persuade myself that murder had been actually done, and a human life cruelly cut short a moment since, before my eyes.

（右譯――斯く言ひ乍ら此の漢子は健氣にもクルリとロングヂョンシルヴァに背を向けて海濱に向け歩き出した。併し彼は遠く行くべき宿命を有つて居なかつた。一聲叫びながらヂョンは片手樹の枝を握んで、脇の下から松葉杖を颯と執り、此の妙な飛道具を空を切つて投げ付けた。杖は氣絶せしめぬべき烈しさを以て、尖つた方を先頭にして、正しくトムの背中の眞中の兩肩の中央に中つた。トムは兩手を空に擧げ、ハッといふ呻き聲を發して、倒れた。

負傷の程度の深淺は何人と雖も知ることが出來ない。音から察してみると、多分、彼の脊骨は卽坐に折れたのらしい。だが彼は回復すべき時間を與へられなかつた。シルヴァは猿の如く敏捷に、足も松葉杖も無しに、時を移さずトムの上に乘つ掛かり、其の防禦無き身體に欄も通れと許り、二度までナイフを衝き込んだ。私の

隱れ場所から、私は、打擊を加ふるシルヴァが聲に出して喘ぐのを聞くことが出來た。

氣絕すつとふことがどんな物であるかを知らない、だが次の瞬間全世界が私の眼の前に霧の樣になつてクルクル廻つたのは慥かだ、シルヴァも、鳥も、乃至スパイグラス山の頂も、左右上下に私の眼の前に廻轉し、耳にはあらゆる種類の鐘が鳴り響き、遠い人聲が耳元に叫ぶやうな氣がした。

我に復つてみると、例の人非人はチャンと身繕ひし、松葉杖は脇の下に、帽子は頭の上に在つた。直ぐ前にトムは身動きもせず芝生の上に横はつて居た、が人殺し奴トムの事など少しも氣に留めない樣子で、血染のナイフを一握の草で拭いてゐた。周圍の物一として以前に變つたものは無かつた、陽は依然として遠慮會釋もなく湯氣立つ沼と劍のやうな山の巔とに照り付けて居るし、たつた一瞬前に而も我が鼻の先で、殺人が現實に行はれて、一個の人間の息の根がむごたらしくも止められたのであるとは何うしても思ひ做すことが出來なかつた。）

人間の行つた滔天の罪惡に、之を目擊して居た「自然」は冷然として無關心の態度を持して居たとは、よく實情を穿つたものである。

Treasure Island は航海の物語であるだけに海語 (nautical terms) が實に多い。nautical term は陸上住居の普通人には緣遠く vividly to realize (見るごとく想像に描き出す) ことが困難であるが、それは市河氏註なり Hersey 氏註なりに懇切に說いてあるから、其れに就て研究すれば可なり之に通曉することが出來、趣味も養へて來る。一體英國民は立法、政治の民であり航海、商業の民であるから、商業や法律や航海上の言葉は豐富に普通用語中に織り込まれてゐるのである。だから一書に就て反覆熟讀海語を研究することが極めて肝要である。さすれば他書を讀む時には刃を迎へて解けるの感があつて愉快である。

以上二書は必讀の重要書であるが、玆に準必讀書として是非玩讀することを推奬し

たい書物がある。それは「ナショナル第四讀本研究」である。「スケッチ」と「寶島」とが稍〻困難で骨折れや草臥れを感ずる時、或は新鮮な理解力を揮つて勇んで難書に向ふの氣が起らないやうな時には頭休め（recreation）として容易にして流暢な本書に就くべきである。本書は井上十吉、岡倉由三郎、石川林四郎、片山寛、上條辰藏、武信由太郎、熊本謙二郎、増田藤之助、佐久間信恭、鹽谷榮、平田禿木などいふ英學界知名の諸家が物見高い「英語青年」にアラを探さうと狙ひ廻つて居る衆人環視の中で筆を執つて成つた物であるから、正確、懇切、有趣味で、詩の scansion（韻律に從つての讀み方）や、發音の注意まで行屆いて居るから、初學者が英語研究の方法を知るには極めて重寶である。本書によつて詳しく徹底的に讀解することの習慣がつけば他書を繙く際にも一字一句をも忽にせざる研究をするやうになるのである。一體 National Readers は隨分長年月の間殆んど我國唯一の英語教科書の姿で用ゐられて居たものであるが、その反動として今日では全く廢つて仕舞つた有樣である。それは此書の内在的價値が無くなつたからではなくて、餘りに流行つた結果、イカガハしい譯解書や獨案内が筍のやうに簇出して學生を毒し、學生自習の良習慣を壞したのが大原因で、も一つは如何に良い物でも年々歳々同じ物では人心に倦きが來たのである。だが其の文章は素直で流暢で、平日常用の達意な文で、會話作文の手本としても申分がなく、殊に頃日頻出の日本出來の諸教科書と比べれば、後者は語學教授の最近の理論に從つて按排した組織的な物であり、諸教科書の美を蒐めた物ではあるが、あまりに理詰めであり、方々からの集め物である爲めに趣味が heterogeneous（雜駁）で渾然たる匂ひに缺けて居る憾みがあるやうであるが、National Readers は最上の卷々は他書から蒐集した材料で出來上つては居ても、西洋人が西洋人の頭で編んだものだけに、如何にも作り物でないやうな感があり、西洋のにほひが全篇に漂つて、無形の感化を讀者に與へる長所を持つて居るのである。そこには Christmas tree がある、雪の坂を滑り又上る sled がある、木の洞の蜂蜜を漁る black bear がある、doll があ

る、hide and seek がある。ナショナル讀本を子供の時に習つた者にして、斯かる美しき記憶をなつかしまない者が誰があらうか！ 此の懷かしき魂のふるさとに對する nostalgia を有たない者があらうか！「會話作文には讀本の三の卷四の卷にある單語、文章を使へば十分だ、それ以上 big words, intricate constructions を使ふ必要なし」と唱へる者が多い。事實西洋人は隨分難かしい文字を會話の中に挾む。書物の中の外出會はす事はあるまいと思はれるやうな言葉を使ふ。が、よくよく實際を究めて見ると、矢張り三、四卷の構文 (construction) が一番立派な作文であり、會話であるのである。これを十分に使ひこなせるだけの土臺が出來て、その上に必要に應じて難語、複文を挿入するならば是れ最上乘なのである。さすれば bookish であるとか pedantic であるとか affectation (氣障、氣取り) であるとかの嫌ひはなくなるのである。この意味に於てもナシナルの四を咀嚼玩索して我が物となすことは極めて緊切の事である。殊に「スケッチ」を熟讀することによる不知不識の影響として英作文の上に big words の行列を招來したり、high-sounding, sonorous, bombastic sentences の續出を演じたりする弊を醫する爲めにも極めて妙である。英語を我物とし、英語的の考へ方を得るために最も必要で且近道は暗記であるが、それには爛熟した林檎のやうな「スケッチ」の文章より「ナシナル」が遙かに良い。だから氣に入つた一章二章を、或は五章十章を、何時でも指のさきから引き出せる (having at your fingers' ends) 程に良く暗記して、之を自分の書いた作文のやうな積りで、高唱することは最も奬めまほしき事である。

次に、矢張り、recreation としてガリヴァー巡島記を一讀すること、及び其の中に書いてある事實を大體覺えて置くことをお奬めする。Gulliver's Travels は十八世紀文壇の傑作である。其の文章は平易明確、其の記實は突飛妄誕であるが、想像の奇抜で vision の正確なること Dante の Divine Comedy (Divina Commedia) にも劣らず、[illegible]く津々たる興趣盡くるを覺えないのである。この書は實は著書 Jonathan Swift [illegible] 裏の不平、滿腔の人間憎 (misanthropy) を吐露したもので人間に對する痛烈なる[illegible]

る、hide and seek がある。ナショナル讀本を子供の時に習つた者にして、斯かる美しき記憶をなつかしまない者が誰があらうか！ 此の懷かしき魂のふるさとに對する nostalgia を有たない者があらうか！「會話作文には讀本の三の卷四の卷にある單語、文章を使へば十分だ、それ以上 big words, intricate constructions を使ふ必要なし」と唱へる者が多い。事實西洋人は隨分難かしい文字を會話の中に挾む。書物の中の外出會はす事はあるまいと思はれるやうな言葉を使ふ。が、よくよく實際を究めて見ると、矢張り三、四卷の構文 (construction) が一番立派な作文であり、會話であるのである。これを十分に使ひこなせるだけの土臺が出來て、その上に必要に應じて難語、複文を挿入するならば是れ最上乘なのである。さすれば bookish であるとか pedantic であるとか affectation (氣障、氣取り) であるとかの嫌ひはなくなるのである。この意味に於てもナシナルの四を咀嚼玩索して我が物となすことは極めて緊切の事である。殊に「スケッチ」を熟讀することによる不知不識の影響として英作文の上に big words の行列を招來したり、high-sounding, sonorous, bombastic sentences の續出を演じたりする弊を醫する爲めにも極めて妙である。英語を我物とし、英語的の考へ方を得るために最も必要で且近道は暗記であるが、それには爛熟した林檎のやうな「スケッチ」の文章より「ナシ゛ナル」が遙かに良い。だから氣に入つた一章二章を、或は五章十章を、何時でも指のさきから引き出せる (having at your fingers' ends) 程に良く暗記して、之を自分の書いた作文のやうな積りで、高唱することは最も奬めまほしき事である。

次に、矢張り、recreation としてガリヴァー巡島記を一讀すること、及び其の中に書いてある事實を大體覺えて置くことをお奬めする。Gulliver's Travels は十八世紀文壇の傑作である。其の文章は平易明確、其の記實は突飛妄誕であるが、想像の奔で vision の正確なること Dante の Divine Comedy (Divina Commedia) にも劣らず津々たる興趣盡くるを覺えないのである。この書は實は著書 Jonathan Swift の裏の不平、滿腔の人間憎 (misanthropy) を吐露したもので人間に對する痛烈なる

錄であるが、叙述があまりにも精妙で、事實があまりにも面白く、諷刺は巧妙に隱れ
に隱してあるので、讀者はしかなることを覺えず興味に釣られて讀み行くことが
るのである（尤も最終篇たる第四篇に至つては人間罵倒なることをさとらない
することは困難であるが）。これ年少者必讀の Classics の一として珍重せられる所
である。英米の少年の必讀の書籍は、本書及び、同じ十八世紀文壇の傑作で英國民の
貿易植民性を助長せしめたとの評ある Defoe の Robinson Crusoe、結構說話の巧妙
人の意表に出で想像の奔放富瞻なる天馬空を行くの慨ある Arabian Nights' Entertain-
ments、其の他 Aesop's Fables および Andersen's Fairy Tales 或は Grimm's Fairy
Tales, Alice in Wonder-land 其の他である。かかる書籍が英米少年成長の食餌とな
つて居る以上は、吾等英語を研究する者も矢張り英米人必讀の書は讀む必要があるの
である。況んや讀むことが厭な義務でなくて實は面白くて堪らざるに於ておや。
Gulliver's Travels は四篇より成る。第一は小人國（Lilliput）行き、第二は大人國
（Brobdingnag）行きである。小人國は人間を五寸にも足らぬ小人の規模に押し下げ
て、其の拮据經營、自尊虛榮を大人の眼を以て見て、笑ふべき實情を暴露したのであ
る。大人國ではこちらが雲衝くばかりの大人の群に伍して其の超人間的力に玩弄さ
れ、おのが無力をシミジミ見せ付けられるのである。又大人中の窈窕たる美人の面相
をツクヅク拜觀するに薄絹を延べたらん嬋娟たる花のかんばせが實はザラザラの皮膚
の、毛穴の凹凸、痣（あざ）の分布、二た目と見るべからざる粗笨贅牙な物である、熟ら〳〵
惟んみるに國を傾け城を傾けんずる歐洲著名の美姫といへども矢張り斯くの如きもの
であらう、と書いてある所などもある。第三篇は飛び島（Laputa）其他への航海であ
る。途中支那海で海賊船に追跡され、遂に捕へられる。船長は日本人である。船に闖
入して來た者の中に和蘭人が居つて、哀願に耳も借さず、乘組員を悉く背中合せに縛
つて海中に投じやうと息卷く。日本人船長は少し許り和蘭語を而も極く不完全に話し
たが、蘭人の申出を聽かず、命を助けてやるといふ。そこで著者は蘭人に向つて「同

胞たる基督教徒によりも、邪教徒の方に慈悲心を多く見出すことを遺憾とする」と言つたといふ。茲にも歐洲人に對する著者の皮肉を見るのである。結局小さい獨木舟に移され、日本人船長の情けで四日分の食糧を貰ひ波間に漂浪した－或島に着いて一泊し岩の間を歩いて居ると、晴れ渡つた空の輝く日光を遮る物がある、之れ飛び島ラプタである。それに移し乘せられて二ヶ月程すると又地上が戀しくなり、王の許しを得て、王領である地上の Balnibarbi といふ陸上におろされた。首府 Lagado の大學を訪ねる。中には色々の學究が孜々(しし)として研究に從事して居る。一人は眞黑になつて胡瓜から日光を取出す工夫に八年間も沒頭して居た。獲られた日光は罎に密封して夏季の濕氣を乾かすのに用ゐる筈だと。その人の話に、もう八年もしたら、總督の庭園に廉價で日光を供給することが出來る積りだとの事であつた。も一人は氷を燒いて火藥に拵へる事を考察して居た、そして近く出版する考へだといふ「火の可鍛性に就て」といふ論文を見せた。建築の學者で、家根から造り始めて基礎に及ぶといふ家屋建築の新法式を考へ出した者も居た、蜜蜂と蜘蛛を見て其の可能なる所以を知るべしと氣焔を吐いた。其の外、豚を用ゐて畑を耕す方法だの、世人が久しく絹絲を造るに蠶を飼ふといふ誤謬を犯して居た事を慨して、蜘蛛を以て之に代らしむれば蜘蛛は紡ぐ事を知るのみならず同時に織ることをも解するが故に遙かに優つてゐるではないか、と論ずる學者も居つた。或る部屋を訪うたら、そこには大きな機械があつて、ハンドルを執つて廻轉すると、無秩序に並べてあつた木の片(きれ)の表面に書いてある單語が色々の組合せの文或は文の一部を成してあらはれる、それを助手の學生をして朗讀せしめ寫字生をして筆記せしめる。それが積んで幾十卷の大冊を成してゐた。此の豐富なる材料を接ぎ合すればあらゆる文藝學術の書を世上に供給することが出來るのである。この機械による時は最も無學なる人と雖も廉い費用些少の勞力を以て哲學、詩歌、政治、法律、數學、神學の書物を天才と研鑽とを要せずして書く事が出來るのである、といふ事であつた。以上は學者の世事に迂遠な事と、book-making や日本でも

らば俳句-making などを罵つたのである。

それから猶色々の島を經て日本に來、Yedo で皇帝に謁し、陸路 Nangasac（長崎、時に千七百九年六月九日）に到り、蘭船に搭じて、アムステルダムに行き、英國に歸着した。

第四篇は馬の國への航行である。國の名は馬の嘶きを摸した發音の甚だ困難な Houyhnhnms といふのである。其處では馬が最優等動物で、主人公で、人間は智力品性共に甚だ劣等で、馬のために繫がれて居る Yahoo といふのである。嘲罵も此處に到つては何といふ痛烈さだ！辛辣苛烈人をして卒讀に堪えざらしむるものがある。しかも Yahoo といふ言葉は後の作者に可なり屢く使はれるのであるから英語に志さん者の必ず一讀すべきものである。

次に、Twice-Told Tales. 之も初一年の傍讀（side-reading）の書として極めて趣味多く且有益である。筆に一種の暖か味があり、imaginative で、poetical で、言ふべからざる charm がある。想像を養ふのに好適の書物である。文字も洗練されて居り、雅醇である。殊に各篇纏まりの好い短篇物語であるので一回一篇といふ風に讀み切るのに好都合である。

誰しもよく讀む The Ambitious Guest（大望の客）に、搏天の大望を懷き乍ら旅寐の一夜雪崩に攫はれて行方知れず成り行いた若人を見て、知らるべくして顯はれずに終る幾多 "mute inglorious Milton" の爲めに同情一掬の涙を濺ぐも善からう。

David Swan を讀んで、冥々の裡にいかに幾多の運命が吾等の上に臨んで居るものであるかを知るも妙である。

Footprints on the Seashore の中に、——

But, after all, the most fascinating employment is simply to write your name in the sand. Draw the letters gigantic, so that two strides may barely measure them, and three for the long strokes! Cut deep, that the record may be permanent!

Statesmen, and warriors, and poets have spent their strength in no better cause than this. Is it accomplished? Return, then, in an' hour or two, and seek for this mighty record of a name. The sea will have swept over it, even as time rolls its effacing waves over the names of statesmen, and warriors, and poets. Hark, the surf-wave laughs at you!

（右譯――だが、結局、一番面白い仕事は單にあなたの名前を沙中に書く事です。各文字を、大股で二足歩いても掩ふ事の出來ない位、でかばちもなく御書きなさい、長い棒になると三足でも間かない位。文字が酒滅しないやうに深く掘り込みなさい！政治家、軍人、詩人と雖も是れと同じ仕事に一生の精力を鎖磨するのです。出來ましたか？では一二時間經つて、歸つて此の偉大なる姓名の記錄を捜して御覽なさい。丁度時刻の大浪が政治家、軍人、詩人の名を洗つて消すが如く、海波がそれを洗ひ消して居るでせう。シッ！巨濤があなたを笑つて居ますぞ！）

なども面白いではなかー

その他、

Dr. Heidegger's Experiment

The Wedding Knell

A Rill from the Town Pump

The Great Carbuncle

The Vision of the Fountain

Fancy's Show Box

Howe's Masquerade

Lady Eleanore's Mantle

The Grey Champion

など面白いとして人がよく讀む篇々である。

次に The Use of Life. 之は今日稍〻下火になつたが、可なり長い間專門學校入學試驗準備書として盛行したものであるから、中等學校最上級時代に習つた人々も多いであらう。必ずしも是非讀まねばならないとお奬めする程の物ではないが、讀めば又讀んだだけの效果はあるのである。議論が穩健で、文章は平明で、類書中最も品格に富んだものである。之れ其の著者 John Lubbock（後に Lord Avebury）が常識圓滿で、文藝科學の趣味に富んだ、極めて氣品高き好紳士だつたからである。殊に本書に取るべきは、名言佳句を汎く諸國の文學の傑作から豐富に引用して居る點である。まるで金銀珠玉を鏤めたやうである。眞珠を波斯絨緞にバラ撒いたやうである。薔薇の葉先の露の玉が朝日に輝いたやうである。此の引用の佳句に接することによつて、後に名篇佳什を讀む時その中で曾讀の名句に逢着して再會の喜びを感じ印象を深からしめる利益が大なるものがあるのである。

第一節を結ぶに當つて、讀解力を養ふ着眼點（或は實力養成の最捷徑）を說きたいと思ふが、餘りに長くなるので、後に讓ることとする。

第二節　作文力

作文力養成の方法は澤山あつて、書籍の精讀も、暗誦も、文法の研究も、西洋人との會話も直接間接作文力養成の根幹たり補助たらざるはないのであるが、進んで作文の爲めの作文の稽古に移るとするも、其の方法は色々ある。先づ此の第一年（過渡時代）に於て執るべき方法は力の基礎を据え付けるのにある。それには社會人事の百般に通じ思想發表のあらゆる形式を含んで而も其の英文が明暢達疵（きず）のない善い文章である和文英譯の書物一二冊を選んで、之を精細に研究し、範文は暗記し、Exercises は自分で譯し試みて卷末の著者の譯文と對照し兩者の巧拙を檢討して悟る處あるべきである。和文英譯の書物は高等諸學校入學試驗參考書として毎年どし〳〵發售さるる種類の書物で澤山である。それには善い物もあり、いかがはしいのもある。所謂玉石同

架である。善い物ならどれでもよいのであるが、著者の知れる限りでこれなら確かだと思はるる物二冊を擧げた。岡田氏の分は事實本位に各部門の事をよく擧げてある。譯文も餘りに巧を弄せず原文に極めて忠實である。殊に本文欄外に脚註として各省の名や、陸海軍人の階級名、各兵科の名稱、といつたやうに關係名稱關係語句を掲げてあるのは便利である。南日氏のは語法本位で、必ずしもそれだけを知つて居れば英語の言ひ表はし方は書きて居るといふわけではないが、少いだけにそれによく通じて必要に應じて何時でも念頭に浮び來る程度にして置けば作文の爲めのみならず會話の爲めにも極めて便利重寶である。殊に本書に取るべきは、第四編第二節に十五篇の長文(Longer Pieces)をあげてある點である。多くの作文書短文の練習には力を入れて居るが稍々長い文章の譯例や練習に至つては闕如して居るやうであるが、長文は單に短文を累積したものであるといふのとは違つたコツがあつて、前行の文章を承ける承け具合に非常な巧拙があるものである。But や for の接續詞の臚列に了らないやうに、自然にして緊密な關係を維持するのを本則として、時には讀者に驚愕を與へて注意を新たならしめんが爲めに唐突の出を用ゐるとか、讀んでみては何の奇も何の苦も無いやうな文章も中々人知れぬ苦心を要するものである。だから長文を加へた著者の用意は深切で周到だと謂はねばならぬ。

和文英譯の書物に出る語彙(vocabulary)は文學的著作(卽ち讀書力養成の爲めに讀む種類の書物)に含まれて居るものとは稍々種類の異なつたものが多いから、其の缺を補ふのに益がある。實際の會話の際などには、例へば「寒暖計は何度を示して居る」とか、「物價が騰上して生活難に苦しむ、或は物價が暴落した爲めに破綻した銀行が各地にあらはれた」とかいふやうなことを言ふ必要が引きりなしに起るが、さういふことは讀本や文學書には餘り出ないので、會話力と讀書力とが平行しない憾みがある、その點から見ても會話の基礎材料として一通り和文英譯書を master するのは極めて有效又必要である。

右の方法によりやや自信がついて來れば、雜誌「英語青年」の和文英譯欄を見るが宜しい。課題と、應稿中の二三と、投稿に對する批評と、模範譯文とが擧げてあるから大に參考になる。そして食指大に動かば、自ら課題を譯して投稿するといい。Excellent とか Good とか Passable とかの評辭を頂戴するから自分の力の程も知れて勵みが出るであらう。

第三節　文法力

中學生などには Grammar を嫌ふ傾向がある。之は間違つた考へである。文法は、いふまでもなく、言語使用の實際を觀察して、其の用法の一致（或は多人數の言語上の習慣の一致といふもよからう）を發見し、之を纏めて、其の現象を簡單明瞭な言葉で言ひ現はしたものである。かくかくの事は斯くあるべきものといふやうに叙べるところから、所謂規則（Grammatical Rule）といふものが出來上つたのである。Habit に名づけた名前で、現象あつての規則で、規則あつて後の言語では無い。だから文法は言語の案内記みたやうなもの、案内記を讀んだだけで旅行の實益を收め得たりと傲語することは出來ないが、旅行に案内記を伴侶とすることが如何に無駄を省き、筋道を明示し、如何に趣味と意義とを賦與するものであるかは誰しも知るところである。

文法は初めから煩瑣浩瀚なものに取付くことは策の得たるものでない。初めは極く簡單に取扱つてあるものを反覆熟讀して之を肚に入れるべきである。即ち神田の For Beginners にあるやうに、品詞（The Parts of Speech）の極く簡單な定義及用例を嚥み込むこと。Sentence の要素、Subject や Predicate, Object や Complement. Sentence の種類。Tense や Voice の一般。等を master しなければならぬ。

以上が十分我が物となつてから Intermediate に進む。Intermediate は For Beginners にある事を更に敷衍し、その足らざるを補つたものである。例へば、動詞中最も必要な部分である Six Tenses や Mood (Indicative, Subjective, Potential) や Voice

(Active, Passive) や Verbals (Infinitive, Participle, Gerund) などを詳しく說いてある。文の種類なども一の卷では Assertive, Interrogative, Imperative, Exclamative などであるが、二の卷では Simple, Complex, Compound と進んだ事を說いてあるのである。

以上二卷で大よそ文法の知識の一般は獲られるのである（尤も今日の進んだ文法の說き方とは違つた點もあるが、それは土臺が出來た上では容易に研究が出來腑に落ちる事が出來るのである。term（用語）の如きも今日では Past を Preterite といひ Noun を Substantive と言つたり Direct Object, Indirect Object の代りに Accusative Case, Dative Case 等の名辭を用ゐるが、道理に違つた事はないのである）。

文法の知識が大體獲られたら今度は讀書の際暫らく實地練習として文法的の讀み方をするがいゝ。例へば複雜混淆した文章に逢つた時、その文の Subject は何であるか、Predicate は何であるか、Complex Sentenceなる時 Principal Clause はどれで

Dependent Clauseはどれであるか、又單語で品詞の紛らはしき時それは Preposition であるか或は直ぐその前にある動詞と合して一つの意味を成す副詞であるか (Stevenson 著 Travels With a Donkey 第一章の By the advice of a fallacious local saddler, a leather pad was made for me with rings to fasten on my bundle. 「欺心ある土地の鞍製造者の助言によつて革の軟鞍が私の爲めに造られた、それには私の荷物をくくり付けるべき環が付けてあつたのである」の on は意味に管はずに一寸見ると on my bundle と續く前置詞のやうであるが、實は to fasten on とつづくべき副詞である。これ其の一例)、或は形容詞であるか形容詞の形ではあつても副詞であるか、或は名詞か動詞か、といふやうな具合に一々當つてみる事は善い練習である。斯くすることによつて文章の意味を明々瞭々取る癖がつく。一生斯くの如き讀み方は文の美、詩句の魅惑等文學的鑑賞の態度を取る時には、恰かも霞にほふ花の美觀を賞することを輟めて花瓣を捲り取り蕚や蘂の數を數へることを業とする

が如く、鑑賞を妨げる嫌はあるが、仕舞には習慣が出來て、一々解剖的に當つて見なくとも、殆んど無意識的に名詞は名詞、動詞は動詞、副詞は副詞の働きが明々白々に眼底に映じ來り、一々固有の働きを爲して相犯すことなく、畫家が一々の色彩に鋭敏なる感覺を有つて居ることが全體としての繪畫的效果を看取するに妨げとならざるごとく、笛、鐘、喇叭が一々固有の音調音色を有つて居てそれが合して渾然たる交響樂を響き成すが如く、鑑賞を妨げるどころか、却つて鑑賞を助けること、他のぽんやり讀む癖をつけてはつきり解らぬながら美いとか諧調か善いとかいふ類ひの人達の鑑賞に十倍百倍するのである。

新しい言語學的の研究の土臺の上に立つた新しい說き方の文法としては市河三喜博士の中學の教科書としての文法書がある筈であるからそれを讀むが宜しい。

ネスフィールドの第四文典は文法上百般の事を網羅してある書物として英語研究者の韋編絕ち紙頁破れるほど繙續すべき良書籍である。過渡の第一年時代に於ても、出來るならば Part I 卽ち百五十八頁まで一讀することが極めて望ましい。Part I には初めに一般的定義 (General Definitions) として Sentence, Phrase, Clause, Noun, Pronoun, Adjective, Verb, Preposition, Conjunction, Adverb, Interjection, Number, Person, Infinitive, Participle, Gerund, Factitive Verb, Complement, Accent, Emphasis (=sentence stress) などを極簡單に定義說明してある。その如何に簡單明瞭であるかは僅かに七頁半を費して居るだけだといふ事でよく分るであらう。それからあと百五十八頁まではそれを敷衍してあるのである。八品詞を說いたあとに Analysis of Sentences (文の解剖), The Same Word in Different Parts of Speech, Syntax, を說き、Comma や Period, Colon, Semicolon, Hyphen, Dash, Bracket など Punctuation の意味用法まで詳しく說いてある。これで文法上の知識一通りは出來るのである。

英語で書いてある文法書を、他の多くの讀むべき書もあるのに初めの一ヶ年で百五十八頁まで讀むのは困難だと思ふ人は、九十二頁 Verb の終りまで讀まれるとよろし

いだらう。

第四節　詩

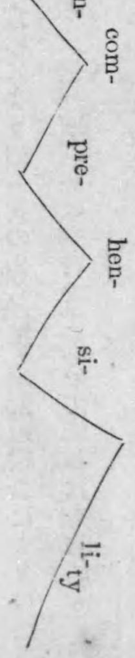
詩は英文學の花である。英語の血脈である。脊髓である。散文の發達は比較的晩近の事に屬し、小說の發生は十八世紀の中葉に係る。印度の富は喪ふとも我がシエークスピヤは失ひたくないとカアライルをして言はしめたその沙翁三十七篇の戲曲も、チョーサーのバラモン・アーサイトの物語も、夢幻縹渺たるスペンサーの神仙女王も、天堂地獄の莊嚴凄慘を描破した雄渾無比のミルトンの無押韻詩(ブランクヴァース)も、人情の機微を穿ち盡したロバト・ブラウニングの dramatic monologues も、キーツの Hyperion も、Coleridge の The Rime of the Ancient Mariner も、（嗚呼英詩何ぞ傑作多き）悉く詩形ならざるはなしのである。英詩に讀み慣れる時は Cary 譯ダンテの Divina Commedia も、Bryant 譯ホーマーのイリアッドも、William Cowper 譯オディシーも、Bayard Taylor 譯ゲエテのファウストも趣味深く感激を以て讀まれるのである。ホーマーやダンテには傑れた散文譯もあるが、詩を散文に引き直したのはテイラーの言つたやうに音樂を言葉に飜譯するやうなもので、面白くない。

人文發達の初期に當つて、文字の使用未だ普及せず、印刷術といふものの發明のなかつた頃には、物語も知識も口より口へ傳ふる外なく、それには韻律を基とした詩歌が記憶に便なるところより盛んに用ゐられたのである。況んや詩は直接感情に根ざして人を動かすこと最も多きに於ておや。從つて各國とも詩歌が文學の源泉となり靈感の原動力となつて居る。英語に於ては文法の例にさへ多く詩が引かれて居るのにも蓋し思半ばに過ぐるものがあるであらう。

吾が國では讀本の間に挿んである英詩を、難かしいもの解すべからざるものとして省略するといふ惡い癖があつた。是れ洵に謬れる傾向である。學問の本末を誤れる仕方である。何となれば感情情緒は人間生活の最も重要なる要素であり、動因である。

人は理智の生活、求欲の生活、意志の生活を營むと同時に情緒生活を營むものである。若し人間に情緒生活てふものが無いならば人間の生活は如何に落莫たるものであらう、窮屈なものであらう、殺伐なものであらう。是れ今日情緒生活（emotional life）が極めて重要視せられ來つた所以である。詩歌は美といふ詩人の坩堝を通して、火の如き嵐の如き感情が淨化せられ美化せられて諧調ある言語となつて發露したものである。「天地をも動かし、眼に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむる」感化力を具有するのは固より其の處である。人間は感情の動物とさへ謂はれる。されば三尺の兒童と雖も言葉の意味はおぼろげながらも奇しき律呂に動かされて詩句を吟誦するのである。苟しくも感情を具備する限り詩が解らぬといふのはそれこそ解すべからざる事であつて、寧ろ其の人が人間と稱せらるべき資格をさへ闕如せることを表白するに外ならないのである。

英詩の諧調は accent の上に立つ。英語はアクセントの言語である。アクセントさへ正しければ個々の音の發音が少々あやしくとも能く通ずるとさへ極言する者がある位である。二綴音以上の言葉は必ずその何れをか強く發音する。而して其の強勢は波の一起一伏するが如く大抵交互に起るのである。例へば



といふやうに。

そして又たとひ單語としては強勢の無い言葉でも文章中にあつて前後の關係上、或は聽者の注意を喚起する爲めに特に強勢を受ける場合がある。所謂 sentence-stress を受ける場合がある。斯くの如く英語はアクセントの極めて強い國語である。從つて強烈なアクセントの前後の綴音は weak form となり、一起一伏、抑揚交錯して微妙なる音樂を奏するのである。詩はそこを利用し音の起伏を整へて諧調の基礎としてある

ので、或は突兀、或は莊重、或は急促、或は緩舒、或は手を拍ち足を蹈ましめ、或は眉を昂げ拳を握らしめるのである。

此の音の强弱抑揚起伏、音色（ねいろ）、光と影等に纖細なる sensitiveness を有しなければ、英文學中の最大傑作の一に數へられる English Bible の音調の美は味ふに由がないのである。詩に通ずることは實に散文の諧調の美惡を鑑別するに有力なる階梯ともなるのである。

詩の讀み方は、意味により卽ち其のあらはす感情の緩急により自然な讀み方をするのを尊ぶのであるが（例へば意味は次行まで續いて居るにも拘はらず行末のところに必ず pause を置くやうな讀み方や、平仄（ミーター）に拘泥し過ぎた sing-song 讀、みなどは忌むのであるが）、併し詩の曲律（リヅム）の構造（スツラクチユア）を知ることは讀詩の趣味を養ふ上に極めて肝要なことで、平仄（或は曲律、韻律などゝもいふ）に從つて讀む卽ち scan し得ることは詩に近づく先づ第一歩とも言ふことが出來るであらう。ミルトンの L'Allegro（快活の人）や Il Penseroso（沈思の人）、ドライデンの Alexander's Feast など忠實に scan して見るがいい。その諧調に富み、吟誦するにつれておのづから手舞ひ足蹈むを覺えざらしむる曲律の美が自然に會得されるであらう。

前にも述べたとほり、英語では必ずどこかに力を入れるのであつて、而も餘りにアクセントが連續することは嫌ふのである結果、アクセントと弱音とは大よそ交互に起るやうな具合になつてる。從つて弱音と强勢とを交互に置いた調子が最も善く英語の精神（genius）に合ふわけである。これを基本とした詩句（ヴアース）を iambus といふ。左の通りである。

I wan-dered lone-ly as a cloud
That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,

A host, | of gold- | en daf- | fo- dils.

（われ野山の上の空高く
浮べる雲のごとく獨りさまよふる
時しもあれや黄金の色の水仙の
夥しき群をぞ認めたる。

——ウォーズワース氷（「仙の歌」）

少しく高く書いた音節が揚音であり、然らざるが抑音である。
反對に揚音起りの格がある。之を trochee といふ。

Tell me | not in | mourn- ful | num- bers
Life is | but an | emp- ty | dream;

For the | soul is | dead that | slum- bers
And things | are not | what they | seem.

（人生これ一場の空夢のみと
悲しき調べもて歌ふ勿れ、
眠れる魂は死せるにて
物は其の外觀の如きに非ず

——ロングフェロウ（「生の讃歌」）

Anapaest といふのは弱々强の格である。

Not a drum | was heard | not a fu- | ne-ral note,
As his corpse | to the ram- | part we hur- | ried.

（彼のなきがらを砦に急ぎ持ち行きし時
吊ひの調べも一聲の太鼓も聞く事なかりさ。
——ウルフ作『ジョンムア埋葬』の詩）

第一行の第二 foot が iambus になつて居り、第二行の最後の foot が弱音一つになつて居る外凡て anapaests である。

Dactyl といふ調子は極めて稀である、左の如し。

Mer- | ri-ly | ri-ly | shall | I live | now
Un- | der the | blos- | som that | hangs | on the | bough.

（樂しく樂しく今より暮さう
梢に懸れる花の下にて。
——沙翁作『テムペスト』中、小曲）

其の他英詩の平仄には Spondee や Amphibrach などあるが、其れ等は單調を破る爲めに餘りに几帳面な規則正しい詩句（ヴァーズ）の中に交え用ゐる位のもので、最も普通なのは iambic, 次は trochaic 及び anapaestic である。此の三者に精熟すれば英詩の調子は手に入つたといふべきである。猶詳しく知らうと欲する者は、ネスフィールドの四百三頁以下を見るがいい。それには詩特有の用語例 (Poetic Diction) まで擧げて至極重寶である。又淺野英文學史附錄英詩韻律法を讀むがいい。

詩の入門としては、流麗暢達で比較的平明なテニスンの詩集なり、又はウアーズワースの詩集なりを買つて几右に置いて意の赴く儘に時々披玩するがいい。テニスンの Lady of Shalott や Godiva, Dora, Morte D'Arthur, Sir Galahad, Crossing the Bar, The Mermaid, The Merman などは一たび玩味した者には忘れがたない思を懷かしめるのである、石川林四郎氏の『テニスンの詩研究』は詳細な譯註を施してあり、韻律の事なども說いてあるから初學者が詩に入る爲めには最適當な書物である。

第五節　發音學の知識

Phonetics は一の科學である。發音機關、發音の方法、音韻の變化、其他發音とふ現象に對し科學的に研究する一個の學問である。其の法則を應用して Shakespeare 時代の實際の英語の發音、Augustus Caesar 時代の Latin 語の發音などを restore することさへ出來るのである。今日では斯(こ)の學が大に尊重せられて文法、言語學、一般語學研究の基礎とせられて居る。だから斯學と、語義及び音韻變化の歴史的研究とをなさざる語學研究者は今日語學研究者として齒されないやうになつた。

發音を能く究めて置かないと文檢に於ける書取、口述試驗の際の reading に於て非常の不利を取らなければならぬ。殊に近頃は phonetic sign の試驗を行ふやうになつた。普通の綴りの文字を與へて phonetic sign で transcribe させ或は文章を phonetic alphabet (phonetic signs のこと、或は phonetic symbols とふつても宜しい) で書ふて置いて之を讀ませしむる等のことをやるのである。

Phonetic sign 卽(すく)發音學と思ふ者があるやうに聞いて居るが、それは勿論間違である。發音學は發音の理論を攻究し、フォネティック・サインは實際の發音を如實に寫す爲めの符號である。今日では巴里に本部を置いてある萬國發音學協會 (the International Phonetic Association) で定めた符號が最も簡單で明瞭で且正確であるから、一般に之を採用し其の使用が次第に弘く流布し來つたのは喜ぶべき傾向である。

發音學の書物は本邦に於てもボツボツ良書が出るやうになつた。高等師範の岡倉教授は我國に於ける斯學の pioneers の一人寧ろ第一人者であるから同教授の英語小發音學で發音學の一般を窺ひ、『英語發音練習カード』によつて實際的發音の運用に慣するやうにすれば至極結構と思ふ。

Sweet 逝き Ripman 稍々人の視聽から遠ざからんとして居る今日にあつては、我國に於て最も人氣ある英國發音學者は倫敦大學の Daniel Jones 氏である。氏は英國

に幾多の發音の流儀があるうち、倫敦及びその附近卽 Southern England に於ける教育ある人士の發音を暫らく標準として之を寫して居る。そこで今日我國に於て能く行はれて居る同氏の發音辭典 (An English Pronouncing Dictionary) も、我國で書かれる發音學の書物も此の所謂 Southern English の發音に則つて居るのである。どうせ鵺的に混淆した發音を覺え込むことが不得策で、初めは先づ何處か一つの地方の發音を覺えることが望ましき以上、暫らく南方英語の發音に慣するやうにして置けば、米國の英語の發音、蘇格蘭英語の發音等も次第に解るやうになるのである。

日常西洋人に接する好機を有する人も、發音學の書に就て一通り正しい發音を意識的に注意して置かないと、向うの言ふ音と我が覺え込んで居る發音とが實際異つて居る場合にでも、自分では氣が付かない內に向うの人の發音を自分の發音に同化 (assimilate) して聽き取つて、終生正しい音を知らず自己の間違つた發音を得々として振り翳して居るといふ例が尠なからずあるものである。

デ"ウンズの Phonetic Transcriptions of English Prose は良い本である。バイブル、Shakespeare, ミルトン以下 Jerome K. Jerome に至るまで數名家の散文を抽いて、左の頁には本文、右の頁にそれをフ*ネティックサインで transcribe したのを掲げて居る。發音の樣式をＡＢＣの三つに分け、Ａは朗讀式の極く正確な（寧ろ正確過ぎるほどの）發音、Ｂは注意深い會話の時の發音（外國人たる吾々が則るのに良い發音）、Ｃは迅速な會話態の發音（之を見れば weak form がよく分り外人たる吾々にその點至極便利である）である。

本書は考へる種類の書物を讀むのには頭が疲れ過ぎて居るやうな場合に、意味に心を勞することなく唯慰みに讀むのに恰當である。西洋人が重要でない言葉を如何に slur over して所謂 weak form にするかといふ事などもよく解り、從つて文章全體の rhythm が呑み込めるのである。西洋人の談話或は書物を讀むのを聞くと、力を入れるべき所には力を入れ、輕く擦過すべき所は輕く擦過して、極めて rhythmical であ

るが、日本人は weak form にすべき所も几帳面に不必要な程度までに明確に發音するので、ギゴチなく却つて意味は不明瞭になるのである。調子が悪いから西洋人に聽き取れない。譬へて言へば西洋人は行書草書で談話するのに日本人は楷書の一點張りで行くのである。西洋人に接する機會に乏しい或は殆んど絶無の人は、殊に本書を晨昏夕讀して讀み方の調子を會得すべきである。斯くして得たる正しき調子を以て後日西洋人に接した時談話に用ゐれば彼我共に能く了解するものである。本書はその利益のみならず副次的利益として、選んであるる文章が何れも有趣味の名文であるからその方面から本書を鑑賞するも妙である。

第六節　文學史の知識

英語を研究する者に二つの傾向がある。語學的傾向の人と、文學的傾向の人と。文學的傾向の人は、英語といふ物を媒として廣く海外の純文學を味ひたいといふ希望を有し、訓詁文法の末に走るよりも感じを主とする。この傾向の人は作品の名前、作家の名前にいふべからざる attraction を感ずる。從つて文藝の批評、作家に對する評論、約して言へば文學史を讀むことが唯何とはなしに愉快である。何時とはなく作家作品の名前も覺えられる。語學的傾向の人は、之と違つて、言葉が醸し出す情緒よりも言葉の使ひざまは其れ自らが無限の興趣を唆るので、phrase や idiomatic expre·sion, 文法語法は面白いが、文藝の潮流、傳統と反抗、作物に顯はるる時代思潮の反映、大詩人（メイジヨーアボウエット）小詩人（マイナーボウエット）、作品名作家名等には煩雜さをこそ覺ゆれ興味は伴はず、文學史といふものに對して一種の恐怖を感ずるが習はしである。各々一長一短は免れないもので、感じを主とする側は言葉の意味を取り違へ乍ら嘖々として其の面白味を吹聽することがあり、語法を主とする者は傑作も駄作も同一視し美惡妍醜一切辨へ知らぬ弊竇に陷る。

文學的傾向の人には英文學史繙讀を奬める必要は無いが、語學的の傾向の人には是

非勸めたいと思ふ。勿論文檢に英文學史の試驗科目は無いが、併し英語の知識の背景として英語の變遷史（Old English, Middle English, Modern English）と共に英文學の歷史の一般的知識は是非無くてはならないのである。英語を以て書かれたる物の最も尤れたるものは言ふまでもなく英文學であるから、その由來の概要卽ち其の時代別及び各時代を代表する大作家並びに傑作に就ては大體の觀念を何時も蓄へて置かねばならぬ筈である。英語を實際にでも讀本に現はるる事項で英文學史の知識の背景が極めて必要なことがあることは皆人の經驗するところであり、心ある生徒から訊かれるにしても大體の事を「知らない」といつては濟まぬ譯でもあり、文檢は英語一般に關する力を驗すところであるので、試驗官から如何なることを問はれるか分らないのであるから、旁々必ず一通りの知識は備へて貰ひたいものである。

初めは矢張り日本語で書いたものが要領を得易からうから、それには旣出の書籍のうちでは、よくあらゆる事項を網羅し親切な書き振りで各作家の美點長所を讃め上げてある書物として淺野文學士の英文學史を讀むことが最も善いと思ふ。その以前に坪內逍遙博士の英文學史が出たが、之は書林に就て求めにくくもあり、作家に對する評價が古いので好參考とは言ひ惡い。近頃小日向定次郎氏の英文學史（第一卷ミルトンまで）が出たやうだから之に就くもよいであらう。

目下のところ英文學史は文檢の問題に必ず出るといふわけではないのであるから、他の必修の學科を勉强する合ひ間合ひ間に、一の趣味として、讀誦するやうにしたらよいと思ふ。さすれば英語をやる爲めに讀むべき書物の絕好の指針を供給しても吳れるし、その價値の評價をするのに大に役立つであらう。

第七節　雜誌

雜誌を讀むことは色々の點に於て利益がある。時事の英語を知ることに於て、解釋和文英譯の力を進むることに於て、英語に關する雜多の知識を得趣味を廣くする點に

於て、英語界の趨勢を察知するを得る點に於て。

雜誌の種類は洵に多い。其れ〳〵購讀者の要望を滿して居る。その生滅起伏も亦目まぐるしいほどである。

英語雜誌中質實高級で最も信賴するに足るものは『英語青年』である。英語界知名の人々を寄稿家に有し、疑はしい點あれば讀者は直ちに之を問題とするが故に執筆者は一字一句を苟もせず最善を盡す趣きがある。「英學者最新の研究は之を本誌に載す る」と同誌の廣告文にあるが必ずしも誇大の言とのみは言へぬ。讀書力をつけやうと思へば同誌の英文和譯欄（と名をつけてゐるわけでは無いが）に主に現代作家の短篇小說（稀に論文）の譯註が出る。和文英譯は主筆武信氏が每號擔當してゐる。時事英語は新聞記事の切拔が二三頁載つてゐる。其他は所謂諸家の研究、或は海外留學者の、通信報告等で有趣味の文字に滿ち啓發されるところが多く英語研究者の參考になる節々が多いのである。文檢に志す者は或一定の時期はかかる雜誌を趣味と熱心とを以て熟讀すべきである。

第八節　辭書

「辭書と首ッ引き」といふ言葉がある。それほど辭書は語學研究には必要なものである。子供の時から其の國語の中に育ち、四六時中絕えず耳と眼から這入つて否應なしに覺えさされた言葉でない限り、意味の探索に發音の詮義に辭書を賴りとすることは寔に已むを得ざる事である。

英語研究者に必要な辭書は多種多樣であるが、最小限度として必備の物をあぐれば、英和、和英、熟語辭典、外國發行の物一種、及び發音辭典であらう。

英和にも和英にも良い書物が多く出て居て、何れも特長を備へて居るので何れを最も良しと定めるわけにも行かないが三省堂の模範辭典なり井上十吉氏の辭典なり、武信氏の和英井上氏の和英のどれか一種づつを有つて居ればよろしいのである。

熟語本位の辭典としては齋藤秀三郎氏の中辭典は安心して推奬せられ得べき良著である。發音の採用の仕方も穩健であり、解釋は齋藤式の氣の利いた文法本位の排列法に從つて排列してあり、熟語は一々用例を sentence で示してあるので極便利である。熟語のみならず單語の辭書としても良い書物である。齋藤氏幾十年の撓みなき英語研鑽の結晶と言つて宜いであらう。

言葉の眞の意味を徹底的に知らうといふのには、邦語で解釋した辭書のみでは不可である。必ず英語で說明を施してある外國出版の辭書を併用しなければならぬ。現今に於て典據とすることの出來る最も善い辭書は Oxford の New English Dictionary（之は最良の辭書であるが浩瀚で高價なので各人が之を備へるといふわけには行かぬ）を簡潔にした The Concise Oxford Dictionary だが、名前の示す如く說明の用語其の他を極度まで要約簡裁してあるので初學の人には一寸引きにくいだらうと思ふ。さういふ向きには Chamber's Twentieth Century Dictionary が宜しい。

英語の單語の記憶法の一として採るべき手段は語源（Etymology）を尋ねて root や prefix や suffix に分解して理解した上で記憶することである。それには兩辭書とも各語の說明の終りに語源を擧げてある。例へば inevitable といふ文字を引いてみる。Chambers には

[Fr.,—L. *inevitab.lis—in*, not, *evitabilis*, avoidable—*evitare*, to avoid—e,out of, *vitare*, avoid.]

とある。これは拉典語（L.＝Latin）の inevitabilis といふ文字から來た佛蘭西語（Fr.＝French）から更に英語になつたといふことを示すのである。而して更に、inevitabilis を解剖すれば in（無）＋evitare（避ける）となり、更に evitare は e（出す）＋vitare（避ける）となるといふわけである。從つて inevitable といふ英語は

in ＋ evit ＋ able

といふ風に出來て居る文字だと目分量して憶えれば忘れないのである。別言すれば

avoid の意味の evitare とラテン語を root とし、否定の意味を有する in を prefix（接頭詞）とし、「……し得べき」の意味を有して形容詞を造るに用ゐられる able を suffix（接尾詞）としてるのである。Prefix や Suffix に就て詳しく知りたいと思ふならばネスフィールド文典の三六〇頁以下（Chapter XXVI）を見るが宜しい。Root（語根）に就ては同書次章（Chapter XXVII）三八五頁以下に詳しい。

英語の發音ほど elusive で slippery なものはない。まるで鰻みたやうである。油斷をすると直ぐ「手な股からくぐり出て」て仕舞ふ。殊にアクセントが難物である。極く最小の部分を除く外ほとんど規則など設けることが出來ない。類推（analogy）は何より危險である。必ず平生絶えざる勉強をすべきである。少し怪しいと思つたら直ぐ辭書に憑へなければならない。Jones の "An English Pronouncing Dictionary" は坐右から離さぬやうにして置くべきである。同辭書には最も普遍的に行はれて居ると看做さるべき發音を第一に擧げて之と同等若しくは less universally used pronunciation は variant として bracket（[……]）に入れて出してある。固有名詞も有名な地名人名、神話や古典に出て來る重要なる人名は出してあるから、辛抱强くこの辭書を使用すれば間違つた日本流の發音の仕方を漸次矯正することが出來るのである。近來市河博士が本辭典を基礎として本辭書に出てない新語や固有名詞を加へ簡單な譯語をも添へて出されたのがあるからその方を求むるも便利であらう。まだ第一年目の予の所謂過渡時代から右の辭書使用を勸めるのも、phonetic sign は僅々二日三日の勞力で直ぐ覺えられるからである。

第九節　解釋力養成着眼點

第一節の終りに、讀解力を養ふ着眼點（或は實力養成の最捷徑）を說くことを後に讓ると言つて置いた。それを玆に說いてみたいと思ふ。

それはかうである。

(一)文脈を明瞭に看取すること。
(二)單語の暗記。
(三)暗誦。
(四)Note-reading.

一見平凡のやうに思はれるかも知れないが、而も之を外にして讀書力養成の捷徑は無いのである。今一々に就て說明しやう。

(一)**文脈の看取。**とはあらゆる文章 (Sentence) を讀む際その Subject と Predicate とを見分けて明々瞭々ならしめることである。英語の文章は、邦文と違つて、必ず Subject とその subject に就て何かを述べる predicate とから成つて居る（命令文その他僅少の例を除いて）。そして Subject は必ずしも恒に文首に在るとは限らぬ。倒裝法その他の技巧によつて何處に潛んで居らうやも知れぬ。だが文脈を辨へない讀み方は、果して本當の意味を取つて居るかどうかを判別するに由がないのだから、必ずどれが subject であるかを見付け出さなければならない。そしてその文章が active voice で書いてあるか、passive voice になつて居るかを見なければならぬ。一々かういふ細心の注意を以て讀む事はその煩に堪えないやうな心持がするかも知れないけれども併し慣るればあとは無意識に殆んど何等の心を勞せずしてさういふ讀み方をして行くものである。文脈がはつきり心に映つて來ない文章だけが特別の注意を喚び起してその文章だけを繰返して讀むといふやうになる。

Subject, Predicate の判別に次いで大切な事は挿入文句 (Parenthetical phrases or clauses) をはつきり見分けることである。言ひ換ゆれば文の主脈と挿入語句とを混同しない事である。例へば

Christianity destroyed beyond all possibility of reconstruction the free, frank sensuality of Paganism.

といふ文章で、主脈は Christianity destroyed the free, frank sensuality of Paganism.

である。beyond all possibility of reconstruction（全然恢復の見込なきまでに）は挿入語句である。括弧に入れてみれば却つて一目瞭然となるであらう。そこに氣がつかなければ、この文章は諒解するに骨が折れることと思ふ。普通は挿入語句は地の文と區別する爲めに、前後にコンマを切つてある。初學のうちは反つてそのコンマに惑はされることがある。

次には that や which や where などを使つて dependent clauses を數多使つてある complex sentence に出逢つた場合に、其の主文はどれ、屬文はどれどれと明瞭に迅速に見分けることである。それには Dickens の小說などは最もいい練習である。ディッケンズは詞藻滾々として筆端から迸るまゝに隨分長い文章を息もつかずに書き立てる。時には sentence の積りで讀んで行くと說明の文句を長く並べ立てた名詞どまりの phrase のまゝで period になることなどがある。

右に擧げた數事は讀書の注意として極大切なことであるから綿密な注意を拂つて實行されんことを希望する。

（二）**單語暗記**。の大切な事、及びその方法等は既に前に述べたから玆に再び贅せぬ。

（三）**文章の暗誦**。之も前項同樣である。暗誦は英語の氣分を手に入れる最捷徑であるから、讀書力、作文力、會話力等各方面に非常な益を及ぼすものである。

（四）Note-reading. とふのは、Classics になつた英語の本に附いて居る詳しい註を綿密に讀むことである。例へば次年度精讀用として擧げた Goldsmith の The Vicar of Wakefield とふ田園小說には英國のマクミラン社から出た註釋の書物がある。それとか、同じ社から出た Shakespeare の Merchant of Venice とか Komeo and Juliet とか Julius Caesar とか、Macaulay の Essay on Milton とか、Addison and Steel の Sir Roger de Coverley とかいふ書物を註釋を賴りとして熱心に讀むことである。註釋は單に本文を讀み解くことの助けとなるのみならず、所謂 marginal knowledge とふつて神話傳說上の事とか、文法上の事とか、語原や言葉の變化など、色々

な附加的知識が得られて、それが何時かしら大變役に立つものである。

讀書力養成の方法としては大略以上で盡きたのであるが、序に、精讀がよいか多讀がよいかといふ事を屢く訊かれるので、それに就て一言したい。之は併用すべきでもある。前に擧げた必讀の書物のやうな具合に二三冊を精讀用と定めて、それは意味の上からも趣味の上からも文法的にも語原的にも發音上からも一言一句一點一畫の末までも苟もせず精密に讀み一箇所も不明瞭な點を殘さざることを期して繰り返し〳〵讀むのである。固より解し兼ねるところが出て來るに違ないが、それは繰り返し〳〵讀み、又考へることをすれば、何日かは氷釋する時機が來るものだ。今年解らずとも明年解ることがある。讀書百遍義自ら通ずといひ、多年沈潛反覆恍然として領悟する所あるが如し、といふの類は洵に道理ある言葉である。多讀用の書物は大體に通ずることを主眼としてあまり辭書等を賴りにしないで流暢に讀んで行くことである。一句一文解らないところがあつても苦にしないでどし〳〵讀んで行くのである。西洋人だつても時には少々解し兼ねるところがあつても管はずに讀んで行くのである、それと同じ心持ちで讀むがいい。多讀は見聞を擴める爲めでもあるが、一つには絶えず英語に親しむといふことと、英語の氣を得るといふところに大なる意義があるのである。

第二章　中堅時代

第一ヶ年の不撓不屈の勉强によつて、英語研究の道筋もおぼろげながら解つたやうだ。勉强の癖もついた。Sketch Book を讀み、Treasure Island を讀み、文法作文のコツも可なり諒解が出來、詩の門戸を窺ひ、發音學の一般を知り、英文學の歴史も略〻大要を摑むことが出來た。顧れば流るるが如き歳月ながら、可なり力も付き趣味も出來た。いでやこの力この趣味を土臺として此の一ヶ年で更にミッシリ力を養ひ、英語を眞に我が有たらしめ、どんな事があつても最早再び退轉することのないやうなシッカリしたものとすることにしやう。

本年度研究用として必要な書物を列記してみれば——

讀書力養成

The Vicar of Wakefield (Oliver Goldsmith)

誰しも愛讀する書物であるだけに色々の edition があるが、どれを買つてもいいわけだが、英國マクミラン社發行（壹圓參拾五錢位）のが詳註が附いてゐるから便利である。研究社英文學叢書のうちにも這入つてゐる。接近の便宜を有する者は見たら參考になるであらう。

A Christmas Carol (Charles Dickens)

これも盛行の書であるから、いくらも edition が出るが、東京神田岩波書店發行（九拾錢）の市河三喜博士註附きのがある。註は二十頁ばかしで玄人向きの極く良い註だが初入の人には詳しくない憾みがあるであらう。それにしても、良い書物である。發音の誤り易い字には本文中にアクセントを附してある。

Sesame and Lilies (John Ruskin)

これはマクミラン社の亞米利加版 'Macmillan's Pocket Series of English Classics'（袖珍英文學叢書）（壹圓位か）の分がよろしい。亞米利加式の老婆深切に紹介序論が附いて居り、內容の解剖があり、六十餘頁の註がある。

King of the Golden River とゝゝ御伽寓意譚も添へてある。

Heroes and Hero-Worship (Thomas Carlyle)

Tales from Shakespeare (Charles and Mary Lamb)

A Child's History of England (Charles Dickens)

The Pilgrim's Progress (John Bunyan)

作文力養成

書物を要せず。

文法力養成

ネスフィールドの四を讀む。これは既に持つて居るから買ふ必要はない。

詩

英詩選釋第一卷　厨川白村著　アルス發行（學生版ならば壹圓八拾錢。これで結構である。普通版貳圓八拾錢。）

Golden Treasury of Songs and Lyrics (Palgrave)

マクミラン社發行註附き四冊が重寶であるが、値段が張ると思ふならば、本文許りの本（どこ發行のにても善し）一冊とマクミラン社發行註のみの本一冊とを買つたらばよい。只 Everyman's Library の内の本は少しづつ拔いてあつて殊に Keats の Grecian Urn などいふ傑作が拔けて居るので面白くない。

英國事情

The Little Londoner (Kron)

英國風物談　飯島東太郎著　大日本圖書株式會社發行

發音學

The Pronunciation of English (Daniel Jones)

（壹圓八拾錢位。今では貳圓位かと思ふ）

英文學史

English Literature (Stopford A. Brooke)

會話

Conversational Reader (Trevor Johnes)

東京瞭文堂發行。

この書は教科書用として書いた小冊子だけれども會話が生きて居る、趣味に富む良書である。

The Art of English Conversation　芝染太郎著　寶文館發行（二圓位か）

新聞

英文東京日日か英文大阪毎日のやうな廉價で紙數の少いもの一種を取り毎日ザッと讀む。

辭　書

The Concise Oxford Dictionary（四圓位か）

《注意　書物の代價等は時々改訂（とは騰げること）するし海外の書籍と雖も震災後輸入の分は前のとは同じでないから右に掲げたのは大よその見當と知るべし。》

第一節　解釋力

"Vicar of Wakefield" は

"the delight of childhood, the study of middle life, and the refreshment of old age"

（少年の悦び讀む書、中年の心を潜めて讀む書、老人の慰みの書）

である。

英國の田舍を舞臺とし、田舍牧師ブリムロウズ一家に纏はる運命の變轉を描いた世にも愛すべくなつかしき田園小說である。一たび繙いた者を魅了し、いつまでも愛讀書として數へしめないでは措かない書である。詩聖ゲェテ始め幾多の偉人文豪をして讃嘆の辭を捧げしめて居る名作である。

作者オリヴァ・ゴウルドスミスは英國第一の、恐らく世界第一の、愛嬌者である。眞面目にして洒脫、極めて虛榮心に富み而も極めて內氣、忽ち錦繡を纏ひ忽ち襤褸を下げ、時あつて大賢時あつて至愚、到る處に失策を演じ一生借金に苦しめられ、幾多の傑作を殘し乍ら四十六年の人生の幕を窮乏の裡に閉ぢたのである。"The honest man is the masterpiece of God" とは屢く彼が言つた事であるが、移して以て夫子自らに適用すべく、その正直で眞率で病的とでも言つていい位慈悲心に富んだ性情は

彼をして逢ふ限りの人に愛着の念を起さしめ、當時文壇の覇王として天下を睥睨した博士ヂョンソンの知遇を得しめたのである。

彼は千七百二十八年十一月愛蘭の Pallas といふ小さい村に生れた。父は Charles Goldsmith といひ、牧師補で、「ヴィカー」の主人公 Dr. Primrose のモデルである。後牧師に進み Lissoy といふ村に移つた。ゴウルドスミスは學校から學校へと轉々したが痘痕のある其の醜い顏と單純な性質と常に失策を演ずるのとで教師生徒の嘲られ物で、運動場ではお化だといつて指さし笑はれ、教室では鈍物だとて笞打たれた。十六になつてダブリン大學の Trinity College に學僕として入學した。そこを Bachelor of Arts になつて卒業したが、大した勉强もしなかつた。それから僧侶にならうとしたり、家庭教師になつたり、色々と職業を試みてみたが、どれも甘く行かなかつた。醫者にならうと志して千七百五十二年エディンボロに行き同五十五年和蘭のレイデンに渡つた。其處では醫學よりも寧ろ笛の方が上手になり、遂に一管の笛を携へ之を吹き鳴らして歐洲無錢徒步旅行の途に上つた。それが却つてゴウルドスミスの性情には適つて居たことであらう。其の間に得た種々の經驗は後年筆の勞働に從事せる際生きた材料として大に役立つたのである。千七百五十六年英國に歸り着いた。その時彼は醫學の學位を有つてゐたが、それが何處で何うして得たものであるか分らない。歸つてからも生活の爲めに種々の事を試つてみたが、到頭筆を執ることになつた。今日と違つて筆で生活を立てることは中々困難な時代だつたので、彼は一生薄給と酷待と困窮とに苦しみ拔いたのである。而し興會一たび到つては天來の靈筆幾篇の傑作を殘した。詩では The Deserted Village（我國では「寒村行」の名で通つてる）, The Traveller, 小說では The Vicar of Wakefield, 劇では She Stoops to Conque, Good-Natured Man, 論文では The Citizen of the World は何れも不朽の作である。彼は千七百七十四年四月四日に死んだ。

Vicar of Wakefield の出版の由來に就ては面白い話がある。ヂョンソンが Boswell に

語つた言葉を引いてみると——

"I received one morning a message from poor Goldsmith that he was in great distress, and, as it was not in his power to come to me, begging that I would come to him as soon as possible. I sent him a guinea, and promised to come to him directly. I accordingly went as soon as I was dressed, and found that his landlady had arrested him for his rent, at which he was in a violent passion..... He then told me that he had a novel ready for the press, which he produced to me. I looked into it and saw its merit; told the landlady I should soon return, and, having gone to a bookseller, sold it for sixty pounds."

（わしは或る朝（千七百六十四年の末つ方）ゴウルドスミスから手紙を受取つた、大變困つて居るが自分の方からは行けないから、成るべく早く來ては貰へまいか、といふのであつた。わしは取敢へず一ギニイを使に持たせて、直ぐ行くと返事をした。そこで身仕舞が濟むなり行つて見ると、家主の主婦が彼を取つ捉えて家賃の催促をしてゐる處だつた。先生プリ〳〵怒つて居た。……それから彼は、小說を書上げて刷する許りにしてあるのがあると言つて出して見せた。讀んで見ると立派な物なので、わしは主婦に直ぐに還るからと云ひ殘して、本屋に往つて、六百圓でこれを賣つた。）

The Vicar of Wakefield は到る處に wit と humour が溢れて居る。話も無邪氣で面白いものである。馬賣りの失敗、隣人フラムボローの家でスリッパ狩りの遊戯に渉中になつて顏を眞赤にして居る處に都方の貴婦人が這入つて來たのでフラムボローなんていふ田舍者の言ひ出した事に碌な事はないといふあたり、デニンキンソンの希臘語交りの天地問答、主人に化けてブリムロウズを饗應し大議論をしてゐる最中に本當の主人夫婦が歸つて來たので大間違付を演ずる下男頭、其の他どれだけ滑稽な場面眞摯な場面があるやら分らぬ。

主人公ブリムロウズ博士は眞ッ正直で失敗も演ずるが世故に通じた人で、その言ふ所格言的の名句が多い。試みにその二三を摘記すれば、——Premature consolation is but the remembrancer of sorrow（尙早の慰藉は悲みを蘇らするに過ぎぬ）、The first fault is the child of simplicity, but every other the offspring of guilt（初めての過失は淺慮の致す所であるが、其れ以後のは罪の所生である）、We are not to be surprised that bad men want shame; they only blush at being detected in doing good, but glory in their vices（惡人に恥辱の念の缺けてることは驚くに足らぬ、彼等は善を行ふ處を見られるのを赧ぢ、惡を爲すを誇りとするのである）、Such as are poor, and will associate with none but the rich, are hated by those they avoid, and despised by those they follow. Unequal combinations are always disadvantageous to the weaker side.（貧者にして富者とのみ交はらむことを欲する者は、己が避くる貧者には憎まれ、己が追從する富者には賤しまる。不釣合の交際は常に弱者に不利也）、Good company upon the road is the shortest cut（旅は道連れ）、Good counsel rejected returns to enrich the giver's bosom（容れられざる忠言は歸り來つて與者の胸を富ましぶ）Man wants but little here below, nor wants that little long（人の此世にて要する所の物は洵に些少にて而も亦須臾の間のみ）等は纔かに大海の一瀾を拾つて見たに過ぎないのである。

The Vicar of Wakefield の研究の方法或は目標は、譬きにスケッチブックを研究した時のやうに單語を憶えることを主眼とするもいいが、此の時期に入つては更にそれより進んだ方法を執るべきで、書いてあることの趣味を覺えること、書いてある人情の機微を察し、humour に破顔微笑し、反覆朗讀することによつて英語の精神（genius）を會得する等鑑賞（アップリシエイション）の方面に足を入れるべきである。著者の如きも本書を玩賞するに及んで東西人情の同一なるに撲たれ初めて英語の堂に入つた感じを起したもので

ある。

良い邦譯の書があればそれと並び讀むことは大益あることであるが、ずつと昔淺野和三郎氏の譯が出てからのち良譯の出たことを聞かぬ。

"A Christmas Carol"

英國に文豪詩星は數限りもなく多く居る、その幾十百家の幾千萬篇を、ただ通覽するだけならばいざ知らず、沈潛反覆心讀味到することは短い人生の能くする所で無い、冀くば車載斗量の群小作家を避け、其の尤なる者に就き其の代表標準の作を擇んで熟讀したい、卽ち第一流中の第一流、大家中の大家と目せらるべき者を選擇して潛心研究したい。この見地から著者は愼重に考慮して以下の諸家を獲たのである。

Chaucer, Spenser, Shakespeare, Milton, Keats, Browning, George Eliot, Thackeray, Dickens, Meredith, Hardy.

ディケンズは愉快なる作家である。小さい時から人生の辛酸を嘗め、社會の暗黑面を見盡したに拘らず、その作は日光に滿ち、涙を滑稽の裏に隱して、非常な上機嫌で筆を走らした。故にその小說は humour と pathos と交錯し、漫畫(カリカチュア)式に好んで醜惡の方面、極惡の人物を描いたに拘らず、全體の調子極めて愉快で健全である。

Dickens の傑作多いうちで、必ず讀むべき作品は The Old Curiosity Shop（女主人公 the little Nell は何等の可憐さぞ！），A Christmas Carol, The Pickwick Papers, Oliver Twist, David Copperfield, Tale of Two Cities, Nicholas Nickleby, Barnaby Rudge, Martin Chuzzlewit, Domby and Son 等である。初めてディケンズに入るとしてはクリスマス・キアロルや The Old Curiosity Shop など極めて適當である。

クリスマス・キアロルは降誕祭の讃歌を小說で行つたのである。スクルージ (Scrooge) といふ名からして crooked な金を蓄めることより外に目のない因業親爺、金も無いくせにクリスマスが芽出たいなんぞといふのは愚の骨頂だと思つて居る親爺に、幽靈が現はれて、その幽靈が、「過去のクリスマス」、「現在のクリスマス」、「未

來のクリスマス」といふ三つの靈を次ぎ次ぎに連れて來て、スクルージに、無邪氣に降誕祭を祝つて居た幼年時代、あらゆる人がクリスマスを祝つて居る現在の時代、及び今の儘で經過して行けばスクルージの最期は悲慘あるのみといふことを示す未來の時代、を見させる。それを見せられたスクルージは恐怖に身の毛をよだたせて、翻然として前行を悔ひ改め、虐待して使つて居た書記に立派な贈り物をし、書記と酒酌み交して心からクリスマスを祝つた。爾來彼は生れ變つた善人となつてクリスマスを祝ふことになつた、といふ筋である。

靈に導かれてあらゆる場面を見てあるくところ、活動寫眞の如く、極めて想像に富み、詩的な筆遣ひである。筆致の一般を示す爲めに「現在のクリスマス」から一節を抽いて見る——

And now, without a word of warning from the Ghost, they stood upon a bleak and desert moor, where monstrous masses of rude stone were cast about, as though it were the burial-place of giants; and water spread itself wheresoever it listed, or would have done so, but for the frost that held it prisoner; and nothing grew but moss and furge, and coarse rank grass. Down in the west the setting sun had left a streak of fiery red, which glared upon the desolation for an instant, like a sullen eye, and frowning lower, lower, lower yet was lost in the thick gloom of darkest night.

"What place is this?" asked Scrooge.

"A place where miners live, who labour in the bowels of the earth," returned the Spirit. 'But they know me. See!"

A light shone from the window of a hut, and swifty they advanced towards it. Passing through the wall of mud and stone, they found a cheerful company assembled round a glowing fire. An old, old man and woman, with their children

and their children's children, and another generation beyond that, all decked out gaily in their holiday attire. The old man, in a voice that seldom rose above the howling of the wind upon the barren waste, was singing them a Christmas song; it had been a very old song when he was a boy, and from time to time they all joined in the chorus. So surely as they raised their voices, the old man got quite blithe and loud, and so surely as they stopped, his vigour sank again.

（右譯――さて今度は、靈より一言の豫告もなく、彼等（靈とスクルージ）は荒凉たる曠原に立つた。そこには、巨人の墓場ででもある樣にゴロ石の大塊が散らばつて居り、水は恣に流れて居た、否霜で閉ぢつけられなかつたなら恣に流れたことであらう。苔と、はりゐにしだと、雜草との外何一つ生えて居なかつた。遙か西方には今し沈む日が一條の火色を殘して怒つた眼のやうに暫し荒野を照して居たが、だんだん低くなつて遂には闇夜の幽暗に呑まれて仕舞つた。

「玆は何處ですか？」スクルージが訊ねた。

「地の中で働く鑛夫の住む所だ、」靈は答へた。「だが彼等は俺を知つて居る。御覽！」

とある小屋の窓から燈火が輝き出た。泥と石で塗り立てた壁を通つて、二人は赤々と燃える火を圍んだ一座の人達の處に來た。極く高齡の老人夫婦と其の子、孫、曾孫達で祝祭日の晴衣を着飾つて居た。老人は荒原を吹く風の雄叫びに消されて聞こえるか聞こえぬか位の聲で、クリスマスの歌を唄つて聞かしてゐた。それは老人が子供だつた時代の極古い歌であつた、人々は時々聲を合せて囃しの處を唄つた。彼等が聲を張り上げる毎に老人は快活になつて聲も高くなり、囃しが已む毎に、老人の元氣も亦沈んだ。）

右に擧げた處は極普通の文體であるが、本書は一體に highly colloquial English で書いてあるから、非常に生き生きしく、結構は荒唐無稽であつても、書いてある情景

は生きて居て、切れば血が出るかと思はれるほどである。ディケンズの書いた物は總べてさうである。外の作家の物は有り得べきことを有り得べきやうに書いても現實味が乏しいやうな感があるのがあるが、ディケンズは有り得べからざることを意識し乍ら書いても、又有り得べきことを歪に、捩ぢ曲げて、態ざと不自然なやうに書いても、それが倫敦の街上或は南英の田舍に實際眼前に起りつゝあるやうな現實味を有つて居るのである。是れ彼れが少年時代街頭を彷徨して市井の事が腦裏に沁み付いて居るからである。

Christmas Carol は易しいやうで所々難かしいところのある本である。中學卒業直後にも讀むべく大學の課本としても適當である。故に學者宜しく反覆精讀義おのづから通ずるまで之に熟することを心懸くべきである。さすれば英語習得上大なる益があること疑無い。

"Sesame and Lilies"

以上勉强し來つた書物は殆んど總べて物語（尤もスケッチブックには論文體の文章も可なり有つたが）であつた。英語の研究は固より偏する事を許さない。小說と共に詩、論文、隨筆、劇とあらゆる部門に亘らなければならない。玆に論文體の物で平易明暢兼ねて思想を養ふ一助ともなるものとしてラスキンのセサミ・アンド・リリズを選ぶことにする。

Sesame and Lilies は三つの講演（レクチヤ）を蒐めたものである。Of kings' Treasuries（王者の寶庫）、Of Queens' Gardens（女王の花園）、及び Of the Mystery of Life and its Arts（人生と藝術との秘義）是れである。

第一の講演「王者の寶庫」は精神的王者たるの道を說いたのである。精神的王者たらんが爲めには其の友とするところを選ばなくてはならぬ。最も尊貴なる友交は大詩聖大文豪とのそれである。依つて一字一語も苟もせず謙虛なる心を以て斯かる大作家の書物を研究し其の思想其の心情に突入し肘を把つて俱に語るの友情を結ぶこと是れ

精神的王者たるの正路である。眞の王者たらん者は浮雲の富無用なる軍備を堆積することを能とせず、人民の爲めに圖書館その他を建ててやつて精神的食糧卽ち偉人傑士の心胸を拓く眞正の sesame（胡麻、門扉を開く合言葉）を給與すべきである。――といふのが其の趣意である。それで之を讀書論と呼んでもいゝ。一語一語を綿密に檢索すべきのみでなく一シラブル一シラブルの微に至るまでも注意して考覈すべきであるといふ一例としてラスキンはミルトンの抒情詩 Lycidas の一節を引いて數頁に亘つて解釋評論して居る。これなぞ殊に英學生たる者の學ぶべき點である。

第二「女王の花園」は女子教育論である。第一の講演と姉妹篇で、婦人の理想を示し、家庭の女王として、夫の伴侶として、其の清高なる情感を以て夫を高め夫を助け夫を鼓舞（インスパイア）すべき、婦人の眞の位置と力とを說いて居る。さういふ高貴なる婦人道の理想を實現する爲めには、矢張り男子の場合と同じやうに、之を教育に俟たなければならないのである。本講演の中に、シェイクスピヤの描いた人物を論じて、沙翁には hero と稱し得べきものなく、在るものは heroine のみだと言つて居る點は味ふべきことである。Othello も Coriolanus も Caesar も Antony も Hamlet も Romeo も Antonio も Kent も Orlando も皆缺點ある人物であるが、女性は Cordelia も Desdemona も Isabella も Hermione も Imogen も Queen Catherine も Perdita も Sylvia も Viola も Rosalind も Helena も Virgilia も皆完全なる人間であると。

第三「人生の祕義」では人生の不可思議を色んな方面より觀察し、藝術といふものは高尙なる動機より出發すべきもので人生の祕義の正しき見解に根ざさなければならないものだといふ事を高調して居る。人生の祕義を叩くに、偉大なる宗教詩人ダンテもミルトンも告ぐる所なく、ホーマーもシェイクスピヤも何等の解決を與へて與れず、然らば實際家はといふに是れ亦何等言ふところ無い。要するに吾人は、理窟を言はず謙遜な態度で孜々として働いて居る勞働者に學ぶところが無ければならぬ。そこで藝術は正しい精神で爲さるる實際的活動に賴るべきものである。然るに吾英國にあつて

は農業は人を養ふに足らず、機織は人を衣被するに足らず、建築は人に十分なる家屋を供給して居ない。それで吾々は身を挺して未完の事業を完成しなければならない――卽ち我國民に食と衣と住とを與へ彼等を幸福ならしめなければならない。仕事こそ人生問題を解決すべき唯一の關鍵なのである云々。

作者 John Ruskin は千八百十九年二月八日倫敦に生れた。父は酒類商で極めて美術文學の趣味に富んだ人從つて其交友も文學者美術家が多かつた、母は敬虔な基督敎信者でラスキンの少時ラスキンをしてバイブルを始めから終まで朗讀せしめ之を每年繰返した。之がラスキンの根本思想と文體とに及ぼした影響は非常に大なるものがあつた。ラスキンは幼時から詩を作り文を草し畫を描いた。牛津の大學を出てから、美術批評家として立ち、Modern Painters, Seven Lamps of Architecture, Stones of Venice などの大作を出したが、中年以後は眞の藝術は正しき生活より出發しなければならぬといふ思索の經路から經濟學に興味を持ち、Unto this Last や Munera Pulveris, The Crown of Wild Olive, Time and Tide, Fors Clavigera などゝ經濟學に關する批評の書物を書いた。單に文筆で思想を宣べるに止まらず、富裕なる父から遺された財產を以て模範職工住宅などを建て、社會改善の實際運動をも爲したのである。

ラスキンは花やかな、調子のいゝ、詩的な散文を書いた。中年以後は之を斥けて所謂絢爛を出でて平淡の文章を書いた。近代の文豪である。雲の美を說き、浪の美を知らしめたのも彼である。藝術批評家として人道經濟學の唱道者として世人の蒙を啓いた功績は不滅なるものがある。

Sesame and Lilies は思想文章の圓熟した四十六歲（から四十九歲まで）の作である。文體の一般を示す爲めに第一の講演から書籍論の一節を引く――

A book is essentially not a talked thing, but a written thing, and written not with a view of mere communication, but of permanence. The book of talk is

printed only because its author cannot speak to thousands of people at once; if he could he would,——the volume is mere *multiplication* of his voice. You cannot talk to your friend in India; if you could, you would. You write instead; that is mere *conveyance* of voice. But a book is written, not to multiply the voice merely, not to carry it merely, but to perpetuate it. The author has something to say which he perceives to be true and useful, or helpfully beautiful. So far as he knows, no one has yet said it; so far as he knows, no one else can say it. He is bound to say it clearly and melodiously if he may; clearly, at all events. In the sum of his life he finds this to be the thing or group of things manifest to him,——this, the piece of true knowledge or sight which his share of sunshine and earth has permitted him to seize. He would fain set it down forever, engrave it on rock if he could, saying, "This is the best of me; for the rest, I ate and drunk and slept, loved and hated, like another. My life was as the vapour, and is not; but this I saw and knew,——this, if anything of mine, is worth your memory." This is his "writing"; it is in his small human way, and with whatever degree of true inspiration is in him, his inscription or scripture. This is a "Book."

（右譯——本は本質上、話された物ではなくて書かれた物である、單なる通信の目的を以て書かれた物ではなく、不朽ならしむる目的で書かれた物なのである。談話の本は著者が同時に數千の人に話すことが出來ないから印刷されるので、出來れば無論さうするのだ、——さらいふ本は聲の增加といふ物にすぎない。君は印度の友達とお話しが出來ないでせう、出來れば勿論するのだ、その代りに君は書くのです、さすれば其れは單に聲の運搬に過ぎない。だが眞の書籍は聲を增加する爲めでも運搬する爲めでもなく、それを不朽にする爲めに書かれるのである。著者に言ふ

べき事がある爲めである、著者が、眞であり、有用であり、美にして人の爲めになると認むる物あるが爲めである。著者の知れる限りに於ては未だ其れを言つた者が無い、著者の知れる限りに於ては著者以外に其れを言ひ得る者が無い。そこで彼はそれを明瞭に、能ふべくんば諧律的に、何はさて置いても明瞭に、言ふの義務があるのである。彼一生の見聞中是れこそ彼に明白なる一事であり又或は數事であるのである——是れこそ彼れの此の世の生存が彼に把握することを許した眞の知識眞の洞察である。彼は之を永久に書き殘して置きたい、出來得べくんば堅石に刻して斯う言ひたい「是れが予の内の最善なる物である、是より外には予は飲み食ひ眠り、愛し又憎んだ事衆人と異なる所無いのである。我が生は雲霧の如く今や消えて跡を留めない、が是れだけは予が見、知つた事である、〳〵若し予に諸子の記憶に値するものありとせば、是こそ記憶に値する事である」と。かかるものこそ眞に彼の『書き物』である、これこそ人間としての（卽バイブルのやうに神の鼓吹によつて書いたのでない、又彼の裏に存するだけの靈感を以てしての、彼の天地間に留めた物或は彼が書いた聖書といふべきである。かかる物こそ眞の『書』だ。）

Sesame and Lilies の譯書としては現三高教授栗原基氏が「人間修養論」と題して十四五年前に出したのがある。その後「胡麻と百合」と題して栗原古城氏が出した。何れも果して名譯であるかどうかを知らないが併せ讀んだならば參考になると思ふ。

（因にラスキンは前世紀の末年千九百年に世を去つた。）

以上三書を必讀の參考書として熟讀精究する傍ら、見聞を擴め精神を爽やかにする爲めの傍讀の書は讀書力の相當に付いて來た此の時期には可なり澤山ある。此章の初めに擧げたのはその中の二三に過ぎない。

英國内にあつては Ruskin と竝び、大西洋を越えてはコンコードの哲人エマスンと相應じて、勞働の尊貴を說き、人物の平準化が一般の風潮なる現代の世相を慨して英雄崇拜の大旆を翳した者に Thom's Carlyle がある。French Revolution, Sartor

Resartus, Essay on Burns 其他傑作數ある中に英學生の一度は必ず讀んで inspiration を受けるべき書物は其の Heroes and Hero-Worship である。

Heroes and Hero-Worship は六回に亘る講演から成つて居る。カーライルの意見に從へば世界史は其の根底に於ては偉人の歴史に外ならないのである。而して英雄には色々の種類があるが、其の種類を異ならしめるのは出現の時代の然らしむるところであつて、根本に於ては同一、往くとして可ならざるは無しである。太古草昧の世には神として仰ぎ敬はれ、時代稍〻降るに及んでは豫言者の形を取り、更に後の世には詩人として宇宙人生の眞相を洞察して世人に敎へ、次には僧侶と現はれ、文學者となり奈破翁の如き王者となつて出づるのである。此の意味からカーライルは第一の講演神としての英雄に北歐神話の神オディンを論じ、第二豫言者としての英雄にマホメットを擧げ、第三詩人にはダンテとシェイクスピヤを讃し、第四僧侶としての英雄に宗敎改革のルーテル清敎徒の祖ヂョン・ノックス、文學者としての英雄に博士ヂョンスン、ルソー、詩人バーンズ、王者としての英雄にクロムウェル、奈破翁を評隲して居る。

カーライルの文章は獨創的のもので、奇癖に富んで居るから（例へば Capital letter を濫用したり、獨逸式に勝手に文字を結合したり、phrase 留めの文を書いたり、They were the leaders of men, these great ones. のやうな倒置法を盛んに用ゐるなど）之を模倣すると鶴を描いて鶩に類する變なものになるから、文章の手本にする譯にはいかないが、其の眞摯を說いて虛僞を攻擊するの熱烈なる、想像の生き生きしく讀者をして目見るが如き感を起さしむる詩的なる word-picture の活手腕等、讀者を inspire すること大であるから、或時期には必ず傾倒の情を以て愛唱すべきである。殊に英語を研究する吾等に取つては其のダンテ、シェイクスピヤ論、ジョンスン、バーンズ論には啓發されるところ多きを感じないわけには行かないのである。Thomas Carlyle は千七百九十五年に生れ千八百八十一年に死んだ。

"Tales from Shakespeare"

はシェイクスピヤ入門の書として極めて好適であるのみならず、單に物語の本として讀むのにも興趣饒かに、高尚なる快樂を與へる本である。西洋ならば少年、日本ならば初入の英語研究家は必ず讀まなくてはならない。啻に沙翁の原作を讀む前に讀むべき書であるのみならず、沙翁の傑作を反覆讀破して其妙文句をあらかた記憶に蓄へてからさて飜つてラムの「物語」に向つて見ると、その原文原語が巧みに梗概の中に織り込まれて毫しも斧鑿の痕を留めざる手際に感嘆の聲を擧げざるを得ない。興味も亦一入である。げにや世に名作梗槩の書は多しと雖も、本書の如く不朽の盛名を擅にしてる物は稀であらう。

Tales from Shakespeare の模ね易からざる手際は、前にも述べた通り、現代英語の間に巧みに沙翁の原語を挿入して而も無縫の天衣の如く渾然として作爲の跡を露はさざる點に在る。それと同時に又沙翁時代以後に英語に入り來つた言葉は出來るだけ避け、古雅美麗なエリザベス女王朝の英語と調和するやうに當時の語法に倣つて古風な言葉遣ひもしてあるのである。

總べてで二十篇のうち、悲劇六篇はチャールズ・ラムの筆に成り、十六篇（主として喜劇）はラムより十六歳年上の姉メーリー・ラムの草する所である。Mary Lamb は才人ラムの共著者たるに恥ぢぬ才媛で、タルフォードの言ふ所によれば「氣立てが優しい人で、知力もすぐれて明晰、言語動作總べてに智慧の輝きがあらはれて居」た。

Charles Lmab は千七百七十五年倫敦に生れ六十歳にして千八百三十四年死んだ。クライスツ・ホスピタル校を十五歳にして出てからは、當り前ならば大學に進んで僧侶になる積りであつたが性來の吃りの爲めそれを斷念し、南海商館（South Sea House）に暫らく勤めた後十七歳の時東印度會社に入り家計を助けた。チャールズの一生は、時々精神病を發する姉メーリーの看護に費された。その點から言へば誠に氣の毒な人である。が此の一事によつても知らるる如く非常に溫情人間味の溢れた人で、それが彼の書く凡ての物に現はれて居るのである。彼の傑作は Essays of Elia

上下二卷で、その中にラムの人となり、彼の心、彼の機智、彼のユーマーが遺憾なく流露して居る。ラムは英國第一の essayist（隨筆家）である。外に Specimens of English Dramatic Poets who lived about the time of Shakespeare といふ著書がある。之は epoch-making book（劃時代の書）といつてもよく、世人は此書に接して熊いて沙翁と同時代の諸作家の美を知り之に對する興味は湧然として起されたのである。

Dickens の "A Child's History of England" を擧げたのは、英語及英文學を研究するための背景として一通り歐羅巴の歴史の知識殊に英吉利の歴史に通ずることが極めて必要だからである。例へば沙翁の歴史劇 (Chronicle Plays) の、King John, Richa d II., Richard III., Henry IV.. Henry V., Henry VI, Henry VIII, などを讀むのに有用なる時代の觀念を與へるからである。

"The Pilgrim's Progress" は一度は讀んで置く必要のある書物である。あのバイブルと同じ古雅な單純な用語で而も叙述の正確で劇的なる、英文學の一傑作として不滅の生命を有するのは故ありと謂ふべしである。殊にあのうちに描かれてある言葉で斷り無しに後の文學に引用され利用されることが澤山ある。例へば、Wordly Wiseman だの Delectable Mountains だの、Apollyon や Vanity Fair や Celestial City などそれである。發端の一節を引いて文體を例示すれば——

As I walked through the wilderness of this world, I lighted on a certain place where was a den, and laid me down in that place to sleep; and as I slept, I dreamed a dream. I dreamed, and behold, I saw a man clothed with rags standing in a certain place, with his face from his own house, a book in his hand, and a great burden upon his back. I looked, and saw him open the book, and read therein; and as he read, he wept and trembled; and not being able longer to contain, he brake out with a lamentable cry, saying, what shall I do?

（右譯――此世の曠野を歩くうち、私はとある洞窟のあるところに來てそのなかに身を臥せて寢ね、眠つて夢を見た。私は夢に、こは如何に、襤褸を纏つた一人の人が我家に面を背けて立つてるのを見た。手には一冊の本を有ち、背中には大きな荷物を着けて居た。その人が件の本を開きそれを讀むのを見た。讀みながら彼は泣き且戰慄した。遂には堪えきれなくなつて「嗚呼私は奈何したら可からう」といふ悲嘆の聲を擧げた。）

其の他讀書力養成として此の時期に讀むべき本は幾らでもある。が略〻右に擧げた必讀及び傍讀の書を大體の標準とし、他は手に入り目に觸るるままに時間と勞力との餘裕のあり次第漁つて讀んで置く事は望ましい事であると思ふ。その一二例をあぐれば Thomas Hardy の短篇 (Life's Little Ironies: Wessex Tales: The Changed Man 等に歛められたるもの)、George Gissing の短篇 (The House of Cobwebs) H. G. Wells の短篇 (Stolen Bacillus and Other Stories) などである。

第二節　作文力

作文力養成としては前の年に勉強した和文英譯の書物を、更に良く憶えて基礎をシッカリ据えるために、本年に至つても繰り返し練習する事は極めて望ましき事である。が進んで本年度の事業としては左の二種類の事を爲すべきである。

第一項　復文法

復文法と玆に名づけた方法は英語の書物の一節を自分で和譯して（其の和譯の方法は初めは忠實な譯進んでは自由な意譯とすること）それを机の抽斗に入れ置き、數日後氣が向いた時取り出して之を英譯するのである。原文の用語と構文の大よそは思ひ出されるが、文章の續き具合、句讀點の打ち方其の他中〻思ふに任せぬものである。構文、用語も隨分違つた物が出來上る。之を推敲に推敲を重ねて、是で最善を盡したといふに至つて、原文を開けて較べて見るのである。此の時原文が最上の良師であ

る。原文に簡潔に言ひ表してあることを我が文では冗漫になつて居たり、すらりと練れた言葉遣ひをしてあるのをギゴチない大袈裟な言ひ方になしたり、意想外な事がいくらも出て來る。玆に到つて原作者の老練さ、その老練さに達する爲めの多年の苦心のほども酌まれて、作文の力が進む傍ら、鑑賞の能も付き、名匠苦心の痕の偲ばるることは此の上なき藥となるのである。

原文選擇の方法、その和譯の繁簡等には第一章及び第二章の解釋力の處に掲げた英文及び譯が（Pilgrim's Progress などのやうな古文を除き）參考になる事と思ふ。

作文の模範として選ぶべき英文は如何なる作家のが良いかといふことは一考を要すべき問題である。文學としては傑作で世々の人心を感動せしめて居るからとて必ずしも作文の範として模倣していいとは限らぬ。何となれば文學は創意（originality）を尙び、作者の個性の形はるるを尊ぶ。從つて其の文章も個性に從つて千差萬別である。桔梗贅牙なるもの、放膽にして法度を眼中に置かざるもの、書いてあること全體より沁み出る感じを重しとして文字の使ひざま言葉の離合集散等の點よりいへば放漫の譏りを免れ難きもの等がある。此の事は教室で諸生に講授して見れば豫想以上に明らかになるのである。著者は Stevenson の文 Hardy の文を講じて、その行文の制約の法度に合して緊密なるに今更ながら驚嘆して流石は文章の大家なるかなと心中窃かに感嘆の聲を發すること屢〻であつた。之に反してあの humanity の涙に溢るる Mrs. Beecher Stowe の "Uncle Tom's Cabin" を講じたる時にはあの弱者に對する同情の熱誠には泣かされながら、將た又あの感傷的な幾場面には思はずホロリとさせられ乍ら、言語使用の末に至つては意義曖昧に困らされた經驗を有して居る。

斯ういふやうな譯で、英國文壇で文章に惡い癖のない疵の無い名家を求めやうならば、Thomas De Quincey, Thackeray, Stevenson, Thomas Hardy 等は先づ指を屈せらるべき大家であらう。併し初學者として直ちにかかる大家（尤もサッカリーなどは直ぐ摸ねてもいいかと思ふ）に迫ることは難事だと思ふこともあるならば、普通世上に

行はれて居る Arabian Nights' Entertainments (Townsend氏刊行)や Andersen の Fairy Tales などは疵のない良い文章で書いてあるし、中等學校のリーダーの四や五は文章として善いのを集め癖のあるところは書き改めたりしてあるから、かかる書物を復文の臺本として、先づ平易で明晰な所謂達意な暢び暢びした文章を書くことを學ばなければならぬ。それが手に入つて思ふことが可なり自在に流暢に（熟練したあとから觀ると簡潔に言へることを廻りくどく言つてるやうな事があつても關はぬ）言へるやうになつた上で、さてこそ自己の個性に從つて工夫を凝らし遺憾なく『己れ』を表現することに努むべきである。初めからそれを望むのは無理、初めは平易明達——これこそ何は措いても先づ目標とすべき事柄である。

第二項　新聞雜誌の選譯

先づ中判の洋罫紙ノートブック一冊を用意すること。

新聞や雜誌や單行本を讀んで居るうち、例へば新聞の『人の噂』『机の塵』『天聲人語』『籠視壁聽』などいふ所や、社說や、雜報や。雜誌で「中央公論」や。單行本では「吾輩は猫である」「象牙の塔を出でて」「みみずのたはごと」などいふのを讀んでゐるうち、これはと思ふ所を（といふ意味は是れならば自分の今の作文の力で大した困難なしに譯せるといふところ、又困難であるにしても不可能ではないといふ見込が付いたところを）用意のノートブックの左の頁に寫して置く。

その採擇すべき piece は一節か二節で意味が纏つてゐるのが宜しい、そして又成るべく自分に興味のある所が良い、さすれば譯するにも氣持がよいからである。併し同時に又文藝なら文藝と一方に偏しないやうに、經濟記事も、政治論も、紀行文も、小說の一節も、何でも成るべく各方面の文體に亘つて種類の多からんことが望ましいのである。

必ずしもノートに寫したのを直ぐ譯すのではない。寫したままで之を机の抽斗に入

れて置く。尤も本年度に於ては和英の辭書を用ゐてもいいことにする（來年にては辭書なしに自分の工夫で譯すことにするが）から知らない文字を引いてそれを和文の下即ち矢張り左の頁に書き寫して置くことは宜しい。斯くして幾篇も和文が溜るであらう。人間の頭（或は氣持）は時によつて一樣でなく、或は理窟張つた物が讀みたい時があり、或は詩のリズムに心を浮かせ度い時もあり、或は海邊に出たい時、山登りがしたい時がある。そこで論文體の文章に讀み倦きて理解力が行き詰り或は小說の頁數を多く累ねて耽美慾が飽滿したりして何か change を求めたい心狀になつた時、その書物をパタリと閉ぢて作文のノートを抽斗から引出して心の赴くままに之を譯し試みるのである。和文を寫した左の頁に對立した右の頁に英文を書くのである。成るべくは自分の胸中に在るだけの英語を思ひ出しそれに樣々の働きをさせて譯すことを心懸くべきであるが、どうしても適切な譯語が憶ひ出せぬ時は和英辭書を利用する。苦心の末引いた言葉は記憶に留まり易い物である。邦語に對して或る英語が思ひ出せても、どうもそれがシックリと充て嵌らぬやうな心持がし何かそれと違つた或る音を有つた適切な言葉が有るやうな氣持が切りに催す時がある。其の音だけは朧ろげに唇の邊に搖曳して而も正確な言葉が出て來ない時がある。さる時には英語の辭書を旁搜するが良い。或は類語 (synonyms) 或は反對語 (antonyms) を探して居るうちにハタリと適語に行き當るの愉快を有することがあるのである。かかる時には Roget といふ人の Thesaurus といふ書物がある、それを引けば適當な言葉を發見し得られることが多い。

次年度に於ても此の法は行ふが方法と程度に於て稍〻違ひがある（第三章第二節を看よ）。即ち本年度に於ては新聞雜誌その他の本の中の較〻譯しいやうな易しい piece を擇ぶが宜しいのである。

左に參考のために、採擇の文章の範を示して見る。

も云ふべき性質を有つてゐる。殊に其思想の一面には、本來甚しく神秘的な傾向のある事も著るしい特色である。それはこの民族に固有な傳說民謠の類が、如何に歐洲一般の文藝のために豐富なる詩的材料を供給したかといふ事によつて明らかに證明されると思ふ。

（厨川白村「小泉先生そのほか」）

ある時雨の降る日に、道風が庭へ出て、池のはたを通りますと、枝垂柳の枝へ、蛙が飛び付かうとしてゐます。

蛙は柳の露を虫とでもおもつたのでせう、飛んでは落ち、飛んでは落ち、何べんも何べんも飛びつかうとします。段々高く飛べるやうになつて、とうとう柳に飛び着きました。

道風は之を見て、この蛙のやうに、根氣がよければ何事も出來ない事は無いと悟りました。それからは一生懸命になつて毎日字を習ひました。ずんずん手が上つて、後には名高い書手となりました。

（尋常小學國語讀本第三）

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニャー〳〵泣いて居た事だけは記憶して居る。吾輩は此處で始めて人間といふものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々をつかまへて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考も無かつたから別段恐ろしいとも思はなかつた。

（夏目漱石「吾輩は猫である」）

急行列車が下關驛を發車する十分前、泰西の神話にでも出て來さうな白い長髮と長い頰髯とに蔽はれた壑と、透徹した眼ざしとの持主である此の印度の詩聖は、默々として一語も語らぬ。案内役である日印協會の佐野氏は次のやうに語つた。

「タゴール氏は本年で丁度六十四歳であるので、定めし老いて居ることと想像して居たのに、前回に勝る程度の元氣を見せて居ります。今回の來朝は抱持する思想の講演にあることは勿論ですが、この際日米問題にも言及されることでせうから、講演の際は氏の口から同問題に對する意見を聞き得る事と思ひます。又氏は北京大學で日支提携の必要を說かれたが、支那側では之を喜ばなかつた爲めに、大變氣を惡くして支那を去つた。何れ日本でも此の意見が出ることと思ひます。」

（大阪毎日新聞）

勝田主計君曰く「政友會の高橋總裁は、往年日銀總裁だつた時、總裁を罷めたら隱居すると言つたものだが、其後大藏大臣となり、更に本人の思ひも及ばなかつた內閣總理大臣の椅子を贏ち得、政友會總裁とまでなつた。當時氏を知る者は、氏が一介の銀行屋で、今日の如き押しも押されもせぬ政治家となることを豫期した者は無かつたのである。此事たるや、一は時勢の變化であるとも云ひ得るが、其の一面には矢張り高橋君の偉

材たることを證明するものでありませう。」

（萬朝報）

フランス近代の名畫家ミレーは或る門弟のスケッチを見て「君は描ける。だが、言ふべき何かを有つて居るか」と言つた。先づ親ら深く感じ、切に悟り、厚く興味を覺えて、而して初めて他をして感じ、悟り、興味を覺えしめる事が出來る。人生に對する驚歎と興味と、それが藝術の最初の要件である。

（横山有策　文學概論）

國際間に正義が確立されず、力を本位とする外交が行はれる現代に於ては、時に一國が他の國家に對して平然侮辱を加へ得る場合もある。併し不正義は決して永久に通るものでない。他に侮辱を加へた國家が、終局に於てそれ相當の罰を受けることは、古今の歴史が明らかにこれを示してゐる。

（大阪毎日新聞社說）

大阪の新進洋畫家小出楢重さんが奈良のとある物持ち老未亡人邸の離れ座敷を借りて居た。

「小出さん、絹蒲團を新調したのですが、最初は男子がやすむものだと申し傳へてゐますから、是非今夜御用ゐ下さい。母屋の座敷に敷いてありますから、」未亡人はさう言つて强いた。

若くて正直で氣輕な小出さんは、退却命令防止のつもりで、新調だといふ蒲團に寢ころんだ、夕刻から。

「昨夜は大變難有う。實はあはしてお留守番を願つて、私達は活動寫眞を見て來たのですよ」。小出君、う一ん、目、白黑。

（大阪毎日新聞話の種）

第三節　文法力

前年度に於てネスフィールドの第四文典の九十二頁まで讀んだ人はその次から、百五十八頁までの研究した人は又その次から、研究に取り掛かること。

百五十八頁までの Part I で、Parts of Speech の事も、Analysis of Sentences（文の解剖）も、Syntax（構文法）も、Punctuation（句讀點）のことまでも說いてあるので、是で一通り文法の知識は出來上つた筈である。百五十九頁より二百八十六頁までの Part II は語や句の上の慣用（イディオム）を說いてあるので、讀書上眞に非常な助けとなるのは此の部分である。その中には Ethical Dative（一六一頁第三四〇節）も說いてある。沙翁に出る a many（一六五頁）も說いてあり、or ere, or ever (before の意) も an

if (=if) も、出て（二五三頁）居るし、It's me, that's him が good colloquial English であるといふ事も（二六五頁）書いてある（この最後の事に關しては市河博士「英文法の研究」參照）。lesser が greater に對する音調上（ユーフォニー）から用ゐられる Double Comparative であることも同じく二六五頁に出てゐる。mutual friend といふ事は理窟からは理に合はぬことであるが能く用ゐられることも次の頁にある。さういふやうなわけで、Part II 中で殊に興味があり爲めにもなる事項は二百五十八頁以下の Chapter XX.——Miscellaneous Words, Phrases, and Constructions である。二七七頁から十頁に亘つて諸種の慣習成句を並べたところなど殊に面白い。學者時々此の部分を回看することは利益あることである。

Part III の「文の變形及總合」の部分は、初めの直接話法より間接話法に變ずる規則を詳說した部分を除く外、小生には大して興味も無ければ骨折つて研究するだけの利益もないやうに思はれる。が人各々見る所を異にするから、讀者にして有益なりと思惟せらるるならば潛心研鑽なさるがよい。別に興味なしといふ先入主を注ぎ込まうといふ量見は無い。

之に反して Paat IV の語原の說明は大に爲めになる。英語で說明した辭書を引き慣れて、語原を可なり覺えて來ればそれを綜合的に說いてある玆の部分の如きは必ず學者に興味を湧かさしめること疑無いのである。三七三頁以下に簡單ながら英語の歷史、外來語混入の由來も述べてある。これも語原の知識が出來ると共に必ず知りたいといふ願望が起つて來る事柄である。言語學などをやる素地ともなる。

先づ本年度に於て、頁數はちと多いやうであるが、此處まで（卽ち三九二頁まで）目を通す事が出來れば至極結構だと思ふ。解釋力養成の爲めの讀書の際に色々と疑義が生じて來たことを着々と解いて呉れるのであるから、本書の此の部分の研究は決して苦しみでは無いと思ふ。讀書で起つた疑を本書が解き、本書で覺えた知識が讀書に役立ち、兩々相俟つて英語の力が進むのは愉快なことである。勇猛心を振ひ起して勉

强するや、力の進むのは加速度で所謂初めは處女の如く終りは脱兎の如くなるを覺えるのである。禪關策進の用語を借用すれば、豈平生を慶快せざらんや、である。

ネスフィールドの此の部分に載せてある知識は誠に豐富で、殆んど如何なる學者と雖も全部を知つて居るといふことは難かしいのである。併し後生畏るべし、いづくんぞ來者の今に如かざるを知らんやだから、後學新進の士は宜しく拮据之を憶え込んで先輩をして顏色無からしめ、日本の英學界を今一層進ましむべきである。

第四節　詩

詩は詩其の物としては文檢に出ない年もある。併し詩を讀む力があり、詩を味ふだけの素養の無いやうな人は必ず文檢に通過することが無いのはよくした事である。學者必ず樂しみとして將た又心を潤すやしなひとして讀詩の趣味を養はれんことを心懸けなければならぬ。

前年度によつて可なり詩を味ふのコツを覺えられた事だから、今年は之を土臺としてふたたびかの燦然たる又馥郁たる詩の空氣に浸ることにしよう。

「英詩選釋」に收めてある詩人は Browning, W. B. Yeats, John Keats, R. L. Stevenson, Henley, E. A. Poe, A. Austin, D. G. Rossetti, Tennyson 等近代の名家巨匠である。作品も

Ode to a Nightingale
Ode to a Grecian Urn (Keats)

や

Love among the Ruins
Evelyn Hope (Browning)

や

Crossing the Bar (Tennyson)

The Lake Isle of Innisfree (Yeats)

など英文學中の絶唱で誰でも知らざる者がない程の定評ある傑作から

スティヴンスンの「童謠」、ヘンレーの「病院にて」の詩、その外小さい珠玉のやうな Bourdillon の有名な八行詩などに至るまでを收めてある。厨川白村氏は上田柳村氏の衣鉢を襲いだ人で、趣味が汎く鑑識眼が高く歐洲各國の文學に造詣が深かつた人である。一體廣い人は淺いのが通則であるのに、白村氏は英語の解釋力も實に緊かりした人で、英學者としても我國第一等の人であつたのに、書物が賣れて立派な家が建つたのが禍因となり鎌倉の海嘯で果てられたのは殘念な事である。

右のやうな次第で本書は趣味眼と解釋力との兩方から細心研究するがよい。

Palgrave の Golden Treasury は「英語の唐詩選」である。（唐詩選と聞いて英語研究の讀者よ、怖れを成し給ふ莫れ。）Palgrave は Tennyson の友人で本書編纂に付てはテニソンの助言に負ふ處少なくなかつた。Palgrave 在世の時の生存の大家のは採らなくとふ方針で、上は Spenser, Shakespeare より下は十九世紀の Wordsworth, Shelley, Keats 等に至るまで名家の名作は（長篇でない限り）之を網羅した。唐代の名詩は唐詩選に盡くと物茂卿は序文に述べたが、それほどまでではないとしても、ポルグレイヴの選に就ても同樣の感があるので、さてこそ英詩の唐詩選といふのである。

分つて四卷となす。Book First は大よそ十六世紀（Shakespeare の時代）。Book Second は十七世紀（Milton の時代）。Book Third は十八世紀（Gray, Burns, Cowper, Blake の時代）。Book Fourth は十九世紀（Wordsworth, Shelley, Keats の時代）の作品である。

先づ逆に第四の卷から讀むがよい。

四の卷の中から易より難に進むとふ趣意で左の順序で讀むがいい。

After Blenheim (Southey)

The Maid of Neidpath (Scott)

"Earl March look'd on his dying child" (Campbell)

Lord Ullin's Daughter (Campbell)

Hohenlinden (Campbell)

The Daffodils (Wordsworth)

以上は極めて解り易い詩である。キャムブルのを多く出したのは偏愛からではない。キビ〳〵と事件を叙した詩で初心者が入り易いからである。選者の眼識を疑ふなくんば幸也。

次に較々文學的價値の高い物に入る。

The Reaper (Wordsworth)

By the Sea („)

To the Cuckoo („)

"My heart leaps up when I behold" („)

"Two Voices are there....." („)

On the Extinction of the Venetian Republic („)

London, 1802 („)

"Milton! thou shouldst be living....." („)

"When I have borne in memory....." („)

更に進んで藝術的匂ひの極めて高い名作を難易にかかはらず摘記してみる。

The Bridge of Sighs (T. Hood)

La Belle Dame Sans Merci (Keats)

Ode to a Nightingale („)

Ode on a Grecian Urn („)

Ode to Autumn („)

On First Looking into Chapman's Homer (,,)
Ode to the West Wind (Shelley)
To a Skylark (,,)
Ozymandias of Egypt (,,)
Threnos (,,)
To the Moon (,,)
Kubla Khan (Coleridge)
Love (,,)
The Burial of Sir John Moore at Corunna (C. Wolfe)
The Old Familiar Faces (Charles Lamb)

、斯ういふやうな具合に、あとは自分の氣の向くままに擇んで讀んだらよからう。詩は理窟では無い。教訓の手段でもない。感情を動かして宇宙人生の永遠に觸れしめ、無限にあくがれしめ、路傍の一草にも涙を濺がしめ、おのづから感情を聖化するところにその職分と使命とがある。此の意味よりしてウァーヅウァースの Ode to Duty は偉大なる Ode として西洋人は讃えるが、善い詩とはいへぬ。

本年度にては先づ右の第四の卷だけを沈潛反覆し涵詠優遊して詩魂を養つたならばそれで十分だと思ふ。キーツ、シェリー、ウァーヅウァースは何度も何度も反覆して味讀研鑽するだけのものは十分あるからである。

第五節　英國事情

文學を味ふにしろ、西洋人と會話するにしろ、英文を草するにしろ、其の背景となるべき英國の事情（法律制度より人文地理、人情風俗、名物器數の末に到るまで）に暗くては何とも仕樣がない。足地に着かざる架空の事となる。是れ近年我が英語研究界將た文部の檢定に Realien が重んぜられ來つた所以である。小說も劇も詩も或は

內面より或は外面より英國事情を明すものたらざるは無いのであるが、而し又別にそれ相當の注意を以て研究する所が無ければならないのである。

英國事情に通ずる最捷徑は英國に居住する事であり、その次ぎは法律、歷史、地理、社交料理舞踏スポーツの書、その他百般の書籍を讀破することであるが、此二者は吾々英語研究家の多數に對して望むべくして行ふべからざることであるから、かねがねその方に心を用ゐて怠らざると共に、出來ることなら、その方面の事を簡單に書いた書物に就きたいものである。

先づ念頭に浮ぶのは Kron の The Little Londoner といふ小冊子である。之には A concise account of the Life and Ways of the English with special reference to London（英人生活習俗の撮要、特に倫敦に關する事多し）といふ側付けがあり、更に「日常生活のあらゆる部門に於ける常用言語を使用し得しむる爲めの材料を添ふ」と附記してあるに負かず、廿八項に亘つて要領よく各種の必要事が述べてある。その內容は、

訪問、商店及び買物、食物食事、住宅下宿旅館、倶樂部料亭新聞喫煙、身仕舞、人體、病氣、家族、教育、社交、算術初步、貨幣度量衡、時間、天候季節、物日、娛樂、郵便電信、旅行、交通機關、倫敦、倫敦市外、田舍、英帝國、陸海軍、常用英語、雜、會話資料

の二十八項で、ロンドンの地圖を一葉添えてある。二百三十七頁の小冊子ながら豐富なる材料を要領よく壓搾したのである。丸善の翻刻で大正七年の定價が壹圓二十五錢だつたから今ではそれより少し上か。本書は英學生必携の良書である。細心熟讀を切に勸める。

飯島東太郎氏の「英國風物談」は往年英人スキート教授が文部の講習に講述したのを譯した物で兩人共著である。寫眞版も這入つて居り、大に參考になる。今果して手に入るかゞ問題である。此書の後篇も出たやうであるが著書は眼にした事が無い、若

し手に入つたならば、之も前書と並んで有益な著述だらうと思ふ。

更に右にも增して手に入り難いかと思ふが、若し手に入つたならば良參考である書物に岡倉教授が昔出した「英語繪單語」といふのがある。讀んで字の如く、英國事情の繪が一冊と、その細部の一々に當る英語を書いた書物が別に一冊、とより成つて居るのである。

右の外英語青年其他の雜誌に在外研究者の通信や何ぞに Realien 上參考になることが出るから常々氣を付けて居るべきである。英國の小說を買ふ時にも詳細な挿繪の這入つた版を氣を付けて買へば百聞一見の大益を得る事が多いから、その邊の注意も必要である。

第六節　發音學の知識

前年度に日本語で書いた岡倉教授の「英語小發音學」を研究した。本年は更に進んで英語で書いてある Daniel Jones の The Pronunciation of English を研究しやう。

ヂョウンズといふ人は何といふ頭の良い人であらう。その書いてある事が實に明朗透徹である。その口型說明圖がすつきりとして居るが如く說明も透き通るやうに明淨で而して要を盡して居る。教授の目的上 (for teaching purposes) 採るべき標準發音 (Standard Pronunciation) を說明してから、その各々の音に對する倫敦訛 (London Cockney) や人による色々の variations をも擧げ、Nasalisation や Assimilation などの發音上の現象を說き、curve-line によつて Intonation を示す等の親切を盡して、而も本論が纔かに六十九頁で纏つて居るといふ一事で如何に其の簡淨明潔であるかが分るであらう。開卷劈頭の文章が

No two persons pronounce exactly alike.

といふに觀て一般を察すべきである。

Part II は Phonetic Transcriptions である。それが七三頁から一二八頁まで五十五

頁、その原文が一二九頁より一五三頁まで二十四頁、總計七十九頁の有用文字から成つて居る。先づ A (Careful Conversational Style)、B (Rapid Conversational Style)、C (Declamatory Style) の三種類に分けて Standard Pronunciation を出して居る。それには小說も、詩も、論文も擧げ、詩の讀み方には Intonation curves を用ゐて抑揚を示して居る。次ぎには Particular speakers (色々の人) の發音を出して居る。倫敦の人もあれば、Lancashire の人、蘇格蘭の人、Edinburgh の人、Glasgow の人と樣々の人に就き、その人の發音を忠實に寫して之を標準發音に照してその差異を說明して居る。最後に生粹の倫敦ッ子の訛を一章出してある。此の部分(パート)を精細に觀れば如何に人に依つて發音が違ふものであるかが分り、發音學卽ち發音といふ現象を忠實に研究記載する科學の研究上參考になるふし尠なからざるを覺えるのである。

以上述べたところによつて分るごとく、ヂ"ウンズの此の著は頁數が少い點に於て、內容が極めて豐富なる點に於て斯學の入門者にこの上なき好適書である。

本書を日夕愛誦する傍には前年度に用ゐた本書の姉妹篇といつてもいいあの Phonetic Transcriptions of English Prose を絕えず朗讀することが實際發音の練習上極めて望ましい。

第七節　英文學史の知識

發音學に於けると同樣に、英文學史も前年度邦語で讀んだから、本年は英語で書いた者に這入りたい。英文學は紀元七世紀以來上下千二百年に亘る長年月の歷史を有するので、之を記述論評した書物は汗牛充棟も啻ならぬ。或は全局に亘り、或は時代別に、或は Romanticism, Classicism, Pre-Raphaelitism 等潮流別に取扱つた書物がドシドシと出る。現在に於ても出つつある。善い書物もあれば感心出來ない書物もある。そこで精細なる研究に入るに先だち、簡明に書いてあつて而も評判の善いものを選んで之に就きたい。それには Stopford A. Brooke 氏の English Literature が恰好であ

らう。

著者の所有して居る同書は一九一九年出版の分で、それには From A. D. 670 to A. D. 1832 といふ傍付けがある。その後に出た本に或は 1832 年以後の事を書いた物があるかとも思ふから若しそれがあつたら其れを求めるに越したことはない。Brooke 氏は詩人に關する批評の書物も出した人で、穩健精到な批評眼を有し、流麗豐潤な筆を有して居るから、讀んで興味があり氣持ちが好い。僅か百六十六頁の小冊子ながら、上は Caedmon, Baeda より下は Byron, Shelley, Keats に到るまで英文學上の事は細大漏さず悉して居る。只遺憾なことは最近代の事に及んで居ない點である (Tennyson, Browning, Matthew Arnold, Clough, Rossetti 等のことは最後の一頁二頁を充たして居るに過ぎない)。最近代及び現代の英文學に就ては別書に就くべきである。(それに就ては第三章參看。)

英文學史研究の方法としては、先づ時代の觀念を明らかにすることが大切である。十六世紀の風潮はどう、その世紀の主なる作家は誰れ、主なる作品は何といふやうに。十七世紀はどう、十八世紀はどう、十九世紀はどうといふ風に。conspicuous landmarks を、つも明瞭に胸中に蓄へて置かなければならぬ。文學の主潮は必ずしも世紀別に劃然たる區劃を成すものではないが大體に於ては世紀別の見方が出來るものである。次には文學の潮流別に見るのもよからう。或は劇の發達の經路、小說の變遷起伏、詩の流動推移といふやうな方面から觀察するのもよい事である。それには文學史を通讀する際その margin に簡明なる「見出し」を書き附けて置くのが一番よろしい。さすれば後でその「見出し」だけを讀んでハッキリと概觀が得られ易い。それから又洋罫紙にでも或は雜記帳にでも、さういふ目標を拔き書きして見れば更に觀念を整理し記憶を助ける便利がある、今參考の爲めに極くあらまかな時代別を示せば左の通りである。

十六世紀　シェイクスピヤの時代

第二章　中堅時代

十七世紀　ミルトンの時代（前半）
　　ドライデンの時代（後半）
十八世紀　ポウプの時代（前半）
　　ヂョンスンの時代（後半）
　　小說此の時代に始まる
　　ロマンティシズムの氣運漸く動き初む
十九世紀　初期、ロマンティシズムの時代（ウァーヅウァース、バイロン、シエリ、キーツ等）
　　中期、ヴィクトーリア時代
　　小說にディケンズ、サッカリー
　　詩人にテニスン、ブラウニング、ロゼッチ、スウィンバーン（所謂ヴィクトーリア朝の四大詩人）
　　後期
　　小說にメリディス、ハァディ、スティーヴンスン
　　詩人にマシュウ・アーノルド、イェツ
二十世紀　群雄彬出の時代
　　小說にコンラッド、ウェルズ、アーノルド・ベネット、ゴールズウァージ
　　詩人にイェツ、メイスフィールド、ギブスン、ノイエス、デラメア
　　戲曲家にショオ、ゴールズウァージ、イェツ、シング、グレゴリー、ダンセーニー

第八節　會話

Conversational English は語學研究にも文學研究にも雙方に必要不可缺ものである。會話の練習は二方面よりしてする。一は Hearing、他は formulae の暗記。

Hearing は讀んで字の如く「聞く」のであるから獨學は出來ない。必ず洋人に就くべきである。西洋人受持の會話科に出席出來る便宜を有つて居れば之に越した事はないが、併し class-room English は大凡そ定りきつたもので、そして又洋人は氣を付けてゆつくりと分り易く言ふのが常であるから、之に熟達したからとてそれで必ずしも會話の達人とは言へぬ。街頭に於て或は家庭に於ての會話には面喰ふことがある。だから成るべく宣教師なり其他の人なりに個人的交際を結ぶやうに氣を附けるが宜しい。その人と談話するのみならず、平易な小說などを rapid reading して貰つてそれに耳を慣らすやうにすることは最上の良策である。悠くり言ふことは分るが、何の問題に關して言ふといふ豫想がつかぬ時卒爾として早口で話しかけられる時は分り兼ねるものである。一體日本に來て居る西洋人は早く言ふやうでも實は手心して洋人同士言ふ時よりも悠くり言ふのであるが、それでも猶斯くの如き有樣である。だから「耳慣らし」といふ事は如何に多くやつてもやり過ごす事が出來ない程大切なものである。Hearing 豈容易の觀をなすべけむやである。

Hearing を洋人無しでやる事は疊の水練には違ないが、併し眞の水練の型を練習するには先づ疊の上でやることが非常に大切な事であるが如く、Hearing を洋人との逢遇にのみ打任せて放任する事は誤りである。先づ第一に發音學其他に照して自分の發音を正しくしなければならぬ。殊にアクセントに注意し、sentence を讀むのに正しい pause を置いて、pause のないところは適當なる intonation で流暢に成るべく（明瞭を缺かざる範圍に於て）迅く讀むことを練習しなければならぬ。そして自分の正しき讀書の聲を絶えず自分の耳に入れることは善い耳慣らしになるのである。前に第一章の發音學の節下で述べた如く Jones の Transcriptions の本を絶えず聲に出して讀むことは sentence-stress と weak form とを覺えて reading 及び conversation の調子を正しからしむるに大效があるのである。

次に、之も前に既に述べたことであるが、會話の言葉の程度としては、或は會話に

用ゐる文の構造 (construction) としては大凡そ中等程度のリーダーの第四ぐらゐのところである。それに必要に應じて單語が出て來るやう vocabulary を豐富に憶え込んで置くがよい。四讀本より上の難かしい構文や big words を濫用すると會話が bookish になり literary style になり pedantic になる虞がある。又あまり單純な文章ばかりでは childish の弊に陷る。だから四ぐらゐの處が丁度適當のところであらう。それでさういふ種類の書物を居常朗讀することを怠らぬやうに心べきである。而して會話には又會話通有の言ひ方があつてそれは必ずしもリーダーから學べるとばかりは限らぬから、さういふ形式的のお定り (formulae) を覺えるやうにしなければならぬ。例へば出會つた時の Good morning や、聞き取れなかつた時の I beg your pardon (何とお仰いましたか) とか、紹介された時の How do you do (或は I am very glad to see you) の類がそれである。さういふ點にもクロンのリットル・ランドナーは重寶である。最後の章たる第二十八章に Materials for Dialogues として幾らかを出してある。さう云ふ形式を覺えて運用が出來るやうになつてからは第四讀本程度の grammatical sentences を縱横に活用し、時には big words をさしはさみ、時には文豪の名句を引用し、時には諧謔を弄して談話に興味を添ふる等相手により話題に應じて己が才分を發揮し以て縱横の伎倆を揮ふべきである。

日本で出來た會話の本で是れはといふ物を著者は寡聞にして知らないが、著者の目に觸れた二三の者に就ていへば、商大教授 Trevor Johnes の Conversational Reader は文學趣味にも富み生き生きしたそして穩健な會話振りであるから會話の模範として推奬に値すると思ふが、今果して手に入るかどうか保證出來ない。芝染太郎氏の The Art of English Conversation は初めに會話の注意があり、その注意は慥かに傾聽する値がある。次に種々の場合を想定しての實例があり、その他日常使用の俗語の例や、格言や、諧謔や、一口噺や、書翰文の書き方や、色んなものを擧げて、最後に日英米大家の卓上演說 (After-dinner Speeches) の實例がある。その卓上演說は立派な人達の

立派な演說で、讀んで面白くもあり、非常に參考になる。その他井上日英會話といふ本があり、English Echo といふ四五冊から成つて居る書物がある。何れも特徵があつて、完きを一冊に求むることの無理な代りには、又何處かに爲めになるところがあるのである。だから自分で是ならばと思ふやうなものを選定して一二冊能く讀んで形式用語を覺えることは會話上達上賢明な方策である。

以上は主として獨學によつて會話を學ばんとする人の爲めに言つたのであるが、洋人に接する機會を有する人に對する注意を述べれば、會話を稽古する上の要諦は、誤謬を犯すことを恐れずおめず臆せず多くしやべるといふことである。かう言つたならば西洋人が可笑しく思ふであらうなどといふ心配は無用である。吾々が外人（例へば支那人など）が日本語を話す時の相手となる場合を考へて見ればよく分る。さういふ時吾々は向うを釣り出して成るべく話させやうとこそすれ、少々「てにをは」違ひなどをしたからとて笑はふなんていふ氣はさう起るものではない。誤りといふ飛石を越えてこそ成功の彼岸には達し得るのである。幾度か落ちて乘馬も自轉車も稽古が積み、何遍か溺れて初めて水泳は上達する。醫者も、（大きな聲では言はれないが）何人かの人を殺して後に名醫となるとか世間では言ふのである。況して外國語の練習には間違つた言ひ方をすることは初學に於ては當り前といふべきである。小兒が母語を練習して居る處を觀察すれば這の間の消息がよく解るのである。必ず大膽に（粗野はいけない、禮儀と good-will は保持すべきであるが）話しかけることを心懸けなければならない。

第九節　新聞

英語新聞を讀むことも或時期の間は必ず爲すべき事であり、英語研究者として一度は通過することを要する關門である。日用の生きた英語は會話と新聞雜誌と同代作家の現代を舞臺とした小說戲曲によつて初めて學び得られるのである。門戸開放とか、

機會均等とか、國際聯盟とか、排日移民法案とか、殺人光線とか、その時その時に內外の話題に上る時事上の問題を英語では何といふ言葉を用ゐて言ひ表はして居るかは新聞に目を通す事による外學ばれることが出來ない。それを知らなければ西洋人と會話する際などつまらぬ事に腦漿を絞らされる事があるのを免れない。新聞には夫れ〳〵政黨的色彩があり、或は文藝附錄のいいのが附いてゐるのがあり、それぞれ特徵があるので、どれがいいといふことは一寸言ひ惡いが、英語研究の初學者としてそんなに頁數の多い第一流の新聞を購讀する必要もないのである。毎日零細の時間を費してホンの一目眼を通す爲めに日本で發行される四頁新聞位が重寶である。それには重要な問題のみを捕へて報道してゐるからである。

新聞を讀むことは解釋力を增進する助けには大してならない。その方に多きを期待するのは誤である。その爲めに同じ時間を費すならば小說なり論文なりシッカリした書物を讀むに越すことはないのである。新聞の要は、前述のやうに時事英語に慣れるといふ點にあるのである。然し新聞の「見出し」及びそれに附屬する「割り註」或は「袖附け」は極めて簡單にして而も印象的で一目直ちにその記事の內容を察しられるやうな文句を使ふことに努めるので、言葉を拔け目なく簡潔に使用するといふ事の參考には大になるのである。

新聞の書き方は多年の經驗上、初めに結果を擧げその由つて來るところは大事な事から徐々に筆を着けて細說するといふやうに、獨特の意の用ゐかたをしてある。その他特別な言ひ現はし方などもあるので、その要領を悟るまでは一寸讀みにくい感じがするものである。そこで新聞に關係した人例へばヂャパン・タイムスの相良佐氏などが「英字新聞の讀み方」といふやうな書物を出して居るから、初めて新聞を讀んでみやうといふ人には大に參考になることと思ふ。

第十節　書翰文日誌

手紙、はがき、電信文の書き方、及び日誌の認め方も一通り心得る必要がある。手紙やはがきの書き方は、初めに當方の所と日附とを書き、次に要件を書き、最後に一寸した挨拶と當方の名前とを書くといつた具合に、一寸した式はあるが要件の文章に到つては我國の候文などのやうに日用言語とかけ離れた形式ばつた點は無い。極く自然を尙ぶのである。尤も今日では邦文の手紙も口語文になりその弊を脱したのは欣ぶべきことである。

英語の電報は one word いくらで料金を徵收される。だから我國の電報も同じ事で、極度までに簡單に書かなければならない。而して簡單の範圍内に於て成るべく詳しくこちらの意が通ずるやうに意を用ゐなければならない。英文電報を打つ必要は普通人にはそんなに起る事ではないが、簡潔に意を述ぶるといふ練習は遒勁なる文章を書く上に大效があるからおろそかにすべきものではないのである。

毎日缺かさず日誌を認めるといふ事は、作文の筆慣らし上非常に有效なものである。吾國の英文家で日誌を書いた爲めに文章が上達したと言つてる人は少なからずある。日誌は毎朝進退のみを繰返さないで、成るべく變化あらしめるやうに、或は感想を書き付け、或は所見所聞を認め、或は讀んだ書物を批評し、或は胸中の鬱悶を洩らすといふやうにして、時に應じ意に任せて、あまり苦心を費さず達意になぐり書きするが宜しい。久しくするうちには、同じやうな筆遣ひに厭や氣がさしてはそこに工夫が生れ、英語の力が付くにつれて冗漫な言ひ表はし方が簡勁な文句に變るといふ風に、おのづから推敲が行はれて來るものである。

第十一節　辭書

前年までは コンサイス・オックスフォード・ディクショナリ は引きにくいものとして、

敬遠して置いたが、併し何を言つても現今に於て小さい辭書でこの位シッカリした好い辭書は無い。言葉の使ひ所、言葉の眞の意味を痒い所に手の屆くやうに巧みに解釋してあるのである。この辭書は初めは解しにくくとも、霎時すると直ぐ慣れて、略字など容易に察しがつくやうになる。一切の無用を卻け、有用な事も極度まで簡潔に推縮めてあるその手際に、人智の靈活さの限りを見せられたやうな氣がして非常な愉快な心持が湧いて來るのである。略し方の一二を例示すれば、wd は word である、Vlu は Verb, p. p. は past participle, dim. は diminutive, etym. dub. は etymology dubious（語原不明）である、又單語の末の語原のところに大文字で書いてあるのは其の綴りの文字のところを引いてみれば分るといふ事である。

英和、和英、齋藤熟語辭典、ヂョウンズの發音辭典は前年度と同じく根氣よく成るべく屢〻引くべきことは言ふまでも無い事である。

第三章　博渉時代

前二年間、誠實に熱心に勉强して來た。本年に入つてからは、前二年と同じ心懸けで底力を養ふことは繼續すると同時に、まなこを高くつけ、眼界を遠く廣くして、拔けたるところを補ひ、吾が知識、趣味識に磨きをかけることを心がけたい。

之を喩ふれば隨分辛い思をして峻坂隘路を踏破し漸く頂上に近づいたのである。今一息勇氣を皷して頂點を究め、そこから波濤の如き群山、ところどころに光つて居る湖沼、白銀の細紐を引きはえたやうな河川、等を指點して登高の樂みを極めやうといふのである。學問の道には固より窮極が無い。一峰登り盡して又一峰である。今登つた山路の難によつて我が脚力を養ひ且脚力に對する自信を獲たから、今後は展觀して知り得た地勢を按じて我が進路を定め、悠々として求知の長程に上らうといふのである。何といふ愉快な事業であらう。

本年度の參考書を列記してみれば——

讀書力養成

△小說三冊

Charles Dickens: The Pickwick Papers

George Eliot: Silas Marner

Thomas Hardy: Tess of the D'Urbervilles

△エッセイ三冊

Charles Lamb: Essays of Elia

Oliver Wendell Holmes: The Autocrat of the Breakfast-Table

R. L. Stevenson: Virginibus Puerisque

△沙翁劇三冊

Shakespeare: Julius Caesar

〃 : Merchant of Venice

〃 : Hamlet

作文力養成

書物を要せず。

文法力養成

Nesfield: English Grammar Bk IV (既出)

市河三喜氏、英文法研究（研究社發行）

詩

Palgrave: Golden Treasury (既出)

Byron: Childe Harold's Pilgrimage

厨川白村氏、現代抒情詩選

英國事情及會話

Ward Lock & Co: London
Kron: The Little Londoner（既出）

發音學

Jones: The Pronunciation of English（既出）

英文學史

小日向定次郎氏、現代英文學講話（研究社）

教授法

H. E. Palmer: The Oral Method of Teaching Languages
〃　　: The Sequential Series

神話、聖書知識

Gayley: Classic Myths
English Bible (Authorised Version)

第一節　讀書力養成

讀書力養成としては、此の時期まで進めば、大家の傑作でさへあれば何でもよいわけであるが、併しそれでは標準が建てにくからうと思ふので前掲のやうな書目を擧げたわけである。（その書目の擧げ方で前二期と違つた點は書物本位でなく著者本位で行きたいので著者の名を先きに擧げたことである）。

一、小說

Dickens の Pickwick Papers を小說のうちに入れるのは變な氣持もしないではないが、さればとて紀行でもなく隨筆でもないから矢張り小說が一番近いと思ふ。只小說としては結構が散漫であるといふだけである。Dickens の小說で難易の點から先づ一番先きに讀んだらいゝと思ふのは、あの可憐な Little Nell を點出した The Old Curiosity Shop である。次ぎは Oliver Twist。養育院で呱々の聲を擧げ浮世の荒波に

翻弄されるが終に邪惡に染まる事なき無垢の青年オリヴァー・ツウィストが Fagin といふ猶太人で泥棒の親分の手に落ち、掏摸術を仕込まれ掏摸の兄貴分に連れられて巾着切を强いられたり、獰猛な强盜が女を殺して倫敦郊外を逃げまはり、遂に逮捕される など筋の變化に富むので近頃よく活動寫眞に映される。次は私塾を經營してる者の惡魂膽をよく描いた Nicholas Nickleby。その他 Tale of Two Cities や Barnaby Rudge などを讀むべきである。

Pickwick Papers（詳しくは Posthumous Papers of the Pickwick Club ピックウィック倶樂部員の殘した書類）は愉快な書物である。Pickwick と Winkle と Snodgrass と Tupman の四人が旅に出て色々の滑稽を演ずるところを書いたのである。先づ西洋『膝栗毛』ともいふべき本である。第一章に倶樂部員の會議――つまらない事をさも事々しげに論じ合ふ――を畫いたところが稍々難かしいやうな氣がすると思ふが、五頁の後の第二章からは旅の記事で、劈頭主人公のピックウィックが失敗の皮切りを演ずるところからドシ〳〵興味に引きずられて讀んで行かれるのである。一度通讀して後は、結構に重きを置いた本でないから何處でも手當り次第の所を開けて憂さ晴らしに讀むのに好い本である。colloquial English で書いてあるので、初めは難かしいかも知れないが、慣れれば何でもない。

George Eliot の小說では、Adam Bede や The Mill on the Floss などが代表的傑作である。が我が國では頁數が手頃なところからかよく Silas Marner が高等諸學校の教科書として用ゐられる。Silas Marner も勿論傑作である。强慾で人附きの惡かつた主人公サイラス・マーナーが吹雪の一夜拾ひ子をして人間性に目醒める事を畫いたのである。ヂョウヂ・エリオットは心理描寫と、性格をはつきり書き分けることとに神腕を有して居た。女ながら英國第一流の大小說家（アッパレ教ヒリ）である。

Thomas Hardy は今年八十四歲の高齡で故鄕の Dorchester に健在して居る。詩人としても有數の人であるが、小說家としては不朽の人である。その傑作には The

Return of the Native, Jude the Obscure, The Mayor of Casterbridge, Far from the Madding Crowd, Under the Greeewood Tree 等がある。一番 popular で誰でも讀むものは前掲の『ダーバヴィルズのテス』である。ハァディの文章は實に fresh である。自然の描寫、自然と人心との交渉を描くことなど洵にうまい。同時代の人であるだけに直接に胸に響くやうな氣がする。生き生きしくて露がたれるかと思はれる。The Return of the Native の冒頭 Egdon 曠野(ヒース)の描寫の如き自然描寫の傑作と稱せられる。Tess にも到るところ巧妙なる自然描寫がある。テスは Alec といふ惡黨の爲めに身を汚されるが併し心は寔に純眞な潔白な天使のやうな人である。Angel Clare と戀に落ち、結婚するに到つてどうしても前身を隱して置くに忍びず、その爲めに幸福を殺がれることはどれだけであるか測り知れないほどであるが、之を打ち明けるのである。終りには飽くまで附け纏ふ Alec を殺すやうな羽目になり斷頭臺上の露となつて薄命な佳人の一生を終へるが、それでも作者 Hardy はこの小說の題號 Tess of the D'Urbervilles に A Pure Woman と傍註を施して居る。誠に無理からぬことである。

以上三冊の外に讀むべき小說は非常に多い。Thackeray の Vanity Fair, Henry Esmond, Pendennis —— Stevenson の Kidnapped, The Master of Ballantrae, Dr. Jekyll and Mr. Hyde——George Meredith の The Ordeal of Richard Feverel, The Egoist, Evan Harrington——Joseph Conrad の Typhoon, Lord Jim——H. G. Wells の Tono Bungay 其他である。

Thomas Carlyle の Sartor Resartus は小說といふべきか論文といふべきか篤嚮に苦むが、作者の人生觀世界觀をよく表はしたものとして我國でもよく讀まれるから英語研究家たらんものの是非一讀すべき書である。宇宙人生社會萬般のことを一の衣裳と見、その衣裳に惑はされず中なる靈、神を見なければならぬといふのが一篇の趣意である。Sartor Resartus とは the tailor mended といふ意味のラティン語で、獨逸の Weissnichtwo（無何有鄕）といふ所の Teufelsdröckh（鬼の糞）といふ哲學者の書き殘

した書類を整理編纂したといふ體に物してあるので卽ち Teufelsdrö·kh といふ tailor の作つたものを retailor (mend) したものといふ意味である。カアライルは詩人的情熱と洞見力とを有し word-painting に巧みな作家であるから本書の隨所にたまらなくいい所々がある。例へば北歐の海角に夜半の太陽を見に行つた時の感懷や、山の上にどん坐つて脚下の都會に蠢々たる人間の生の營みに奔走してるのを望み見て感想に耽るところなどそれである。

二、エッセイ

Essay は英吉利文學中の一枝の花といつてもいいであらう。或る題に就て、心にうかぶよしありごとを縱横無碍に書き付けて、いとあやしうこそ人の心を動かす作品である。之を論文といふは當らない。元より議論もあるが、併しそれは科學の眞理を證明する時のやうに亞鉛の裃を着て果たし眼でムキになつて論理を進めて行くのではなく、眞劍の裏に「茶かし」を藏め、論理の衣で非理窟を纏ひ、さうかと思ふと又眞面目な議論もある。上々下々虛々實々意表に出で意裏に入り端倪すべからざる裡に人道に對する涙を濺ぎ理窟以上の理窟を以て人の心の深奥に觸れるのである。少し味の違ふやうなところもあるが隨筆と譯した方が最も良いと思ふ。隨筆といへば枕草紙にしろ徒然草にしろ一行二行の感想を述べた文章から成ることもあるので適當でないから漫文と言つた方が宜いと言はれるかたもあるが予には矢張り隨筆が適切であると思はれる。近世のエッセイは佛蘭西のモンテーヌから筋を引いて英國では Sir Thomas Browne 以來中々いい essayist が出る。エッセイには自分の感想自分の好惡等僞らず飾らざる自分を出すことが一の特徵を成して居る。この點から英吉利第一のエッセイの傑作は Charles Lamb の

Essays of Elia

であると思ふ。ラムの一生は前にも述べた通り聞いても涙ぐましいものであつたので、その隨筆には惻々として人を動かす處が多い。四十餘篇のエッセイの中先づ取り